

青森県埋蔵文化財調査報告書 第252集

三内丸山遺跡XII

平成9年度

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第252集

三内丸山遺跡XII

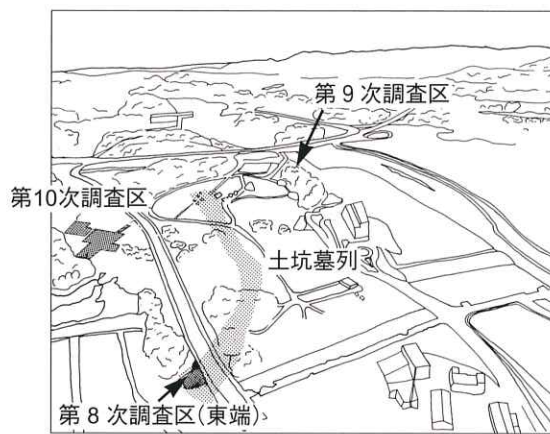
—第8次～10次調査概要報告書—

平成9年度

青森県教育委員会



三内丸山遺跡（東から）



第8次調査区全景（南から）



第10次調査区全景（南から）

〔第8次調査〕



配石を伴う土坑墓（第952号土坑）



土坑墓列（南側）



マウンドが残る土坑墓（第953号土坑）



同 完 掘

〔第9次調査〕



第9次調査区近景



柱穴確認状況



第38号掘立柱建物跡検出状況



木柱出土状況

〔第10次調査〕



第641号住居跡

序

青森県は、史跡三内丸山遺跡を貴重な歴史遺産として保存し、広く活用をはかるため、整備を進めていくこととしており、その基礎資料として発掘調査を継続的に進めているところです。

本書は、三内丸山遺跡の集落の全体像を解明するために、平成9年度に実施した発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、土坑墓列が先年の調査で検出した最西端から約420m東方まで延びることが確認されました。また、掘立柱建物跡や南地区への集落の広がり等を確認することができました。

調査の成果は、三内丸山遺跡の整備や学術研究に活用していく所存ですが、今後の埋蔵文化財の保護と研究に役立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施及び本書作成にご尽力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

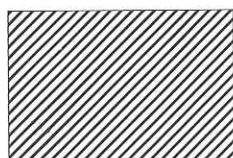
平成10年3月

青森県教育委員会

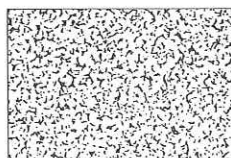
教育長 松 森 永 祐

例 言

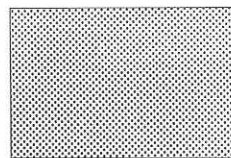
- 1 本報告書は、平成9年度に国庫補助を受け実施した青森市三内丸山遺跡の第8次～10次調査の概要報告書である。三内丸山遺跡においては、平成7年度の調査から調査名を第1次、第2次調査・と着手順に呼称している。
- 2 三内丸山遺跡の遺跡番号は01021番である。
- 3 本遺跡の遺構番号については種類毎に平成4年度調査からの通し番号を付してある。
- 4 挿図の縮尺は、各図毎に示している。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 5 記載にあたっては、土器—P、石器・石—S、柱穴—P₁、P₂の略号を用いた。
- 6 竪穴住居跡の床面積は壁の下端で囲まれた範囲（掘り方面積）をプランニメーターを使用して計測し、3回の計測による平均値を用いた。
- 7 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写したものである。
- 8 遺構番号は発掘調査時のものを用い、遺構内外の堆積土の注記は、「新版標準土色帖」（小山・竹原1990）を用いた。
- 9 出土遺物・実測図・写真等は、青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室が保管している。
- 10 図中に使用したスクリーントーンは以下のものを表す。



地 山



焼 土



柱痕跡

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査目的及び調査要項	1
第1節 調査目的	1
第2節 調査要項	2
第Ⅱ章 調査の方法と経過	3
第1節 調査の方法	3
第2節 調査の経過	4
第Ⅲ章 第8次調査	6
第1節 調査の概要	6
第2節 縄文時代の遺構	7
第3節 平安時代の遺構	12
第Ⅳ章 第9次調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 縄文時代の遺構	16
第Ⅴ章 第10次調査	19
第1節 調査の概要	19
第2節 縄文時代の遺構	22
第3節 平安時代の遺構	29
第Ⅵ章 調査の成果と課題	30
史跡 三内丸山遺跡発掘調査報告書一覧	32
報告書抄録	33

第Ⅰ章 調査目的及び調査要項

第1節 調査目的

三内丸山遺跡は、平成6年に保存が決定され、平成7年3月には青森県総合運動公園遺跡ゾーン基本構想が策定された。この基本構想を受け、県教育委員会では遺跡の学術的解明のための発掘調査を継続して行っており、平成7・8年度には文化庁の補助金の交付を受け、国史跡指定に向けての範囲確認調査（第1～7次調査）を実施し、平成9年3月には国史跡となった。

しかしながら、30数ヘクタールにおよぶ遺跡全体については、これまでの試掘調査で各種遺構が存在することは判明しているものの、集落の全体構造とその変遷、あるいは各遺構群相互の関係等未解決の課題が数多く存在する。

したがって、これらの課題を解決するために必要な調査であるとともに、中・長期的な保存、活用、整備計画の策定や推進のためにも、必要箇所について発掘調査を継続して実施するものとした。

今年度の発掘調査は、今年度から設置された専門家による三内丸山遺跡発掘調査委員会での検討により、集落の全体像と当時の生活環境の解明を当面の課題とし、次の3地点について実施することとした。

第8次調査は、遺跡東側の台地平坦部から低地にかけての調査区域で、先年までの調査で約355mまで確認されていた土坑墓列と道路跡の東端の確認を目的とした。

第9次調査は、遺跡北側の一段低い平坦面で、昨年度の第6次調査区で出土した縄文時代中期後半の木柱周辺の遺構確認を目的とした。

第10次調査は、南地区の南の谷に面した斜面で、昨年度の第5次調査区の東側に隣接する地点で、継続して集落の広がりや変遷、特に台地中央平坦部の掘立柱建物跡の範囲確認と竪穴住居跡の時期確認を目的とした。

(岡田 康博)

三内丸山遺跡対策室による発掘調査一覧

年 度	調 査 名	調 査 地 点	調 査 目 的	調 査 期 間
平成7年度	第1次調査	北地区	集落の範囲確認	7.7.10～7.9.8
	第2次調査	北地区	貯蔵穴の範囲確認	7.7.10～7.9.8
	第3次調査	北地区	貯蔵穴の範囲確認	7.9.18～7.11.2
	第4次調査	北地区	土坑墓の範囲確認	7.9.18～7.11.2
平成8年度	第5次調査	南地区	集落の範囲と変遷の確認	8.5.15～8.11.1
	第6次調査	北地区	低湿地の調査	8.5.15～8.10.9
	第7次調査	北地区	土坑墓の範囲確認	8.10.11～8.11.1
平成9年度	第8次調査	北地区	土坑墓列と道路跡の範囲確認	9.5.26～9.7.25
	第9次調査	北地区	木柱周辺の遺構確認	9.7.28～9.9.10
	第10次調査	南地区	集落の範囲と変遷の確認	9.8.19～9.11.14

第2節 調査要項

1 調査目的

三内丸山遺跡の発掘調査を行い、集落の全体像を解明し、今後の保存・活用に資する。

2 調査期間

平成9年5月26日～平成9年11月14日

3 遺跡名及び所在地

三内丸山遺跡

青森市大字三内字丸山275-1外

4 調査面積

合計 5,368平方メートル

第8次調査区 560平方メートル

第9次調査区 88平方メートル

第10次調査区 4,720平方メートル

5 調査主体

青森県教育委員会

6 調査担当機関

青森県教育庁文化課

7 調査協力機関

青森市教育委員会

8 調査員等

調査指導員 村越 潔 青森大学考古学研究所所長(考古学)

市川 金丸 青森県考古学会会長(考古学)

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 高島 成侑 八戸工業大学教授(建築史)

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭(地質学)

赤沼 英男 岩手県立博物館主任専門学芸調査員(保存科学)

9 調査担当者

青森県教育庁文化課 三内丸山遺跡対策室

主 幹 岡田 康博

主 査 中村 美杉

主 事 斎藤 岳

主 事 小笠原雅行

主 事 佐々木真理子

主 事 葛城 和穂

調査補助員 本間 順子 土岐 耕司 若山 真由美

漆畑 宗人 小鹿 美香子

第Ⅱ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査区は、遺跡全体を網羅するように、平成4年度に設定したものにに基づき、20m×20mの大グリッドを設定し、さらに4m×4mの小グリッドを設定した。

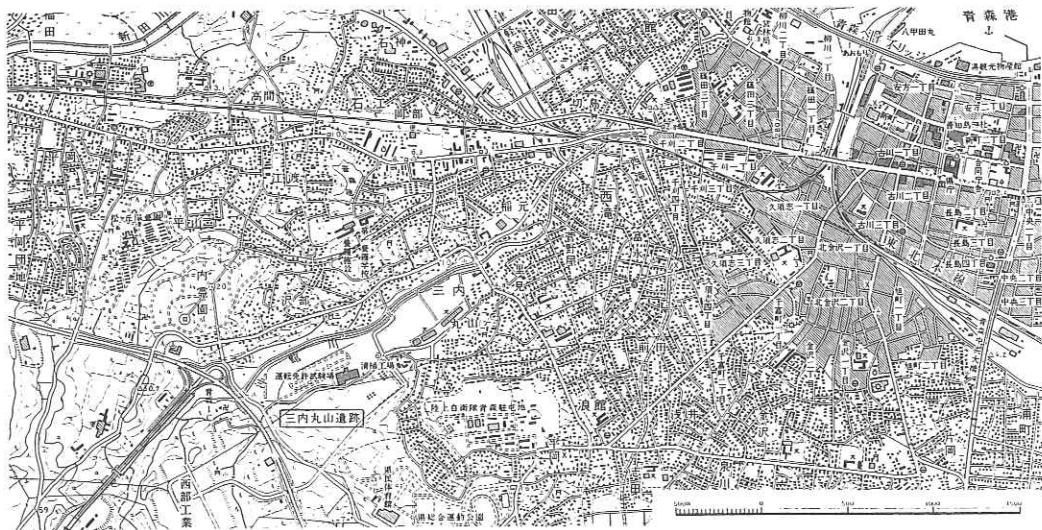
各グリッドは、東から西へはローマ数字とアルファベットを組み合わせ、前者はIから順に、後者はAからTまで20グリッド分を付し、順次ローマ数字を繰り返している。南北方向には1から順に算用数字を付した。また、呼称は北東隅の交点を用いた。グリッドの南北線は磁北を示している。ベンチマークは既設の工事中測量杭から引用し、必要に応じて原点の移動を行った。

基本層序は、平成4～6年度に調査した旧野球場建設予定地の層序を基に、層位の認定を行った。土層には、上位から下位にローマ数字を付した。土色の注記に当たっては、「新版標準土色帖」を用いた。調査はグリッド・層単位で進めた。

遺構の精査は、遺構分布の確認を優先し、構築時期・性格の把握のため、条件のよいものを選び、精査することにした。精査は原則として二分法・四分法で行い、堆積土観察用のベルトを設け、土層を観察しながら進めた。土層には、上位から下位に算用数字を付した。遺構内出土遺物は、必要なものについては平面図・標高を記録した。平面図の縮尺は20分の1を基本とし、状況に応じて10分の1、その他とした。遺構番号は、平成4年度からの調査に引き続き、遺構の種類ごとに確認順に付した。

記録撮影用のカメラは、35mm判と6×4.5cm判を使用し、フィルムはカラーリバーサルとモノクロームの2種類を使用した。35mm判は、遺構確認、堆積土の状況、遺物出土状況、完掘の各段階で使用し、6×4.5cm判による撮影は、適宜行うことにした。また、デジタルビデオカメラによる撮影も行い、調査経過などを記録した。

(小笠原 雅行)



1 図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

第8次調査は、平成9年5月26日から開始した。前年度に検出した土坑墓列は、現在雑木林の中へ延びており、そこにグリッドとトレンチを4ヶ所設定し、手掘りで表土剥ぎを行った。第Ⅱ層除去途中に、土坑墓のマウンドの検出を目的として、各トレンチに1m×1mのベルトを設定した。6月上旬には土坑墓・道路跡が確認され始め、遺構全体を確認するため部分的にトレンチを拡張した。また、平安時代の円形周溝にトレンチを設定し、マウンド・周溝の確認を行った。

6月下旬、4トレンチからも土坑墓が確認された。また、配石を伴うもの、偏平な礫が上面にあるもの、マウンドがあるものなどが確認された。これらの精査を開始するとともに、旧都市計画道路の南側、遺跡範囲東限にトレンチ（5トレンチと呼称）を設定することにした。しかし、現代の土盛りが厚く、重機で表土剥ぎを行うことにした。

7月上旬、5トレンチからも土坑墓が確認され、土坑墓列の総延長は約420mになった。

遺構の精査、地形測量などの作業を進め、7月25日には、一部の精査を残し、ほぼ作業を終えた。

第9次調査は、平成9年7月28日から開始した。グリッド・ベンチマークの設定を行い、前年度に埋め戻した深掘りトレンチ（第6次調査区）の埋め土を除去し、新たに西側に調査区を設定し、表土剥ぎを行った。

7月21日、第Ⅲ層に相当する遺物包含層中から柱穴と考えられるピットが確認された。しかし、二次堆積土を掘り込んでいるため、確認が難しく、当時の生活面からさらに掘り下げて確認を行った。

9月上旬、遺構確認をほぼ終了した。9月10日、精査、写真撮影などを行い、第9次調査を終了した。

第10次調査は、8月19日から開始した。昨年度の第5次調査区に隣接した部分を継続して調査を行った。まず、昨年度確認のみを行った地点と、その北東側に調査区を設定し、重機で表土を剥ぎ、遺構確認を行った。

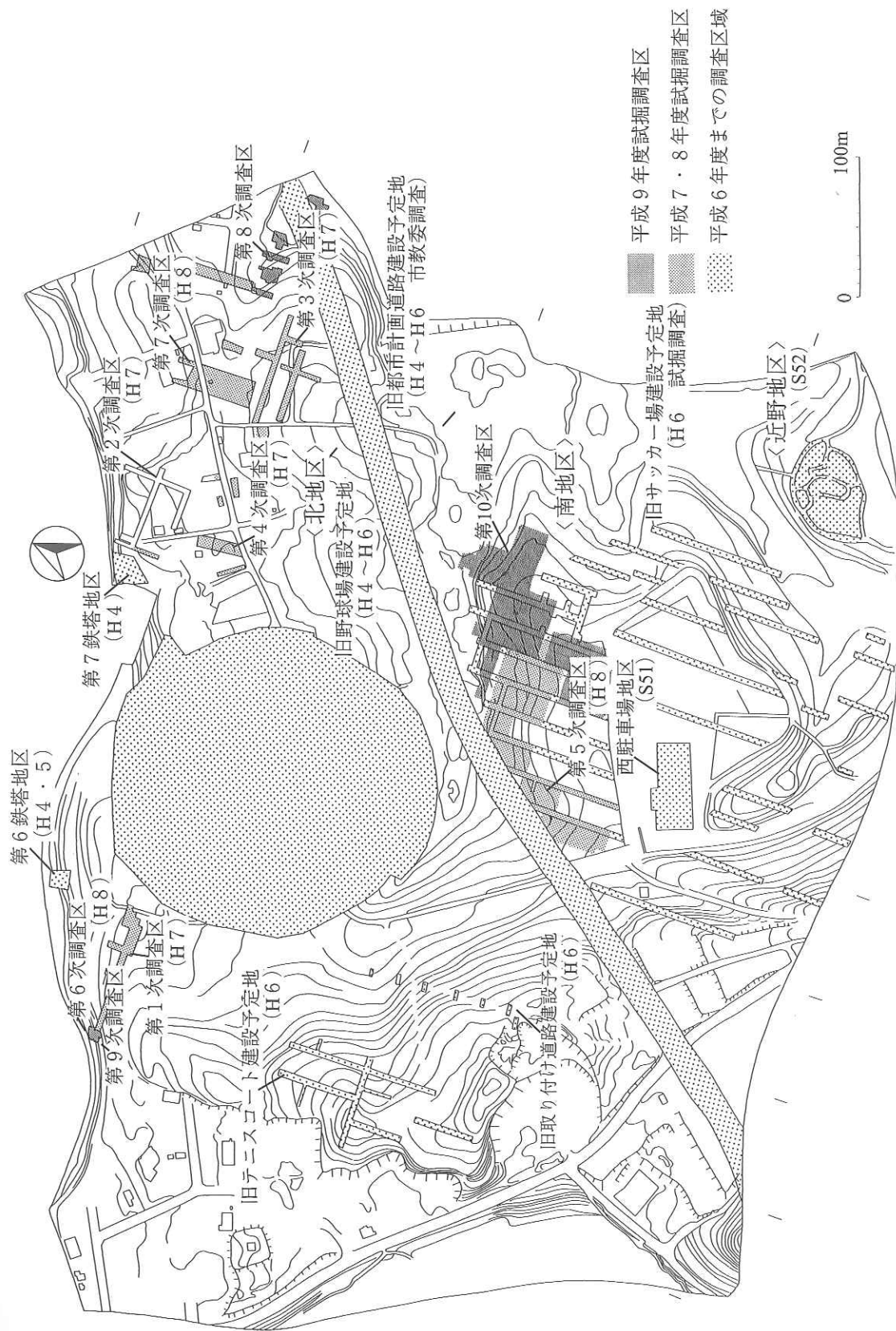
9月4日から、調査区北側の斜面部では竪穴住居跡の、南側平坦面では昨年度掘立柱建物跡の柱穴の可能性のあるとした円形の落ち込みの精査に入った。精査が進むにつれ、これらは縄文時代中期中葉のものが多いことや南側平坦面の円形の落ち込みは土坑であることが分かった。

10月上旬には、調査区を拡張し、調査期間も延長することにした。竪穴住居跡等の精査が進み、これまで例のない深いものが含まれることが判明した。

10月24日、第2回三内丸山遺跡発掘調査委員会を開催し、これまでの各地区の調査について、概要説明を行った。

11月10日、遺構精査をほぼ終了し、埋め戻しを開始した。11月14日、すべての作業を終了し、環境整備、出土遺物・調査機材などの整理・運搬を終え、発掘調査の全日程を終了した。

(小笠原 雅行)



2 図 調査区位置図

第Ⅲ章 第8次調査

第1節 調査の概要

第8次調査は、平成7年度までに確認した土坑墓列の東端の範囲確認を目的とした。調査面積は560㎡で、期間は5月26日から7月25日までである。

昨年度の調査で、土坑墓列は台地尾根筋から、緩やかに落ち込む谷へ向かって延びることが判明していた。そのため、谷の延長上から遺跡範囲東限までを調査対象とし、5ヶ所のトレンチを設定した。

調査区は遺跡の東端であるとともに、舌状台地の先端部に当たる。標高は7～14mほどである。

調査区は、谷地形でさらに雑木林となっているため、表土及び第Ⅱ層が厚く堆積し、後世の攪乱もない。そのため、遺構の残存状況は良好であり、土坑墓の上部構造を知るうえで、貴重な資料が得られた。

また、平成5年度に青森市教育委員会が調査した、旧都市計画道路建設予定地で検出された円形周溝の北側にマウンド状の盛り上がりがあり、残存状況確認のため中心部から四方にトレンチを設定した。

今回検出した遺構は、縄文時代の土坑（土坑墓）23基、道路跡1条、平安時代の円形周溝1基である。このうち精査した土坑墓は9基である。出土遺物は、段ボール箱で5箱分で、縄文土器（中期）、石器などである。

（小笠原 雅行）



3 図 土坑墓分布域全景（北から：復元建物左端から写真左の林までが土坑墓列）

第2節 縄文時代の遺構

(1) 土坑墓

今回の調査で、土坑墓は23基検出された。これまでの発掘調査で確認されたものと同様に、道路跡を挟んで2列に分かれて分布する。この地点でも、道路跡に直交する形で掘り込まれる。平面形は楕円形で、規模は長軸が平均で170cmである。

表土以下の堆積土が厚く、残存状況は良好である。土坑墓の中にはマウンドが残るもの(2基)、配石を巡らすもの(2基)、偏平な礫を土坑墓上面にのせるもの(2基)がある。

道路跡全体は漸移層(第Ⅴ層)まで掘削し、ローム面(第Ⅵ層)を露出させている。その上面は第Ⅱ層が堆積する。それを除去すると、当時の生活面が確認できる。マウンドが残る土坑墓は、掘り込み面から高さ7cmほど盛土がされ、ロームブロックが多量に混入する。配石を巡らせるものの中で、1基は長軸両側に弧状に並べ、円形に配置される。ただし、北側と南側が80cm~130cmほど間隔が開き、北西と南東に軸を異にする礫がある。配石は、円形と長楕円形の礫をそれぞれ交互に、二重に置かれる。中の土坑墓は長軸が2m20cmと比較的大型である。北側の配石は、一部が掘り込みに重複して置かれる。他の1基は、低いマウンドの中に、礫が混在する。偏平な礫が確認面に置かれるものは、いずれも横転した状態である。1基はやや斜めになっており、下側の一部が堆積土中に入り込むが、上側には部分的に第Ⅱ層が堆積する。そのため、本来直立していた可能性がある。

最東端の土坑墓は、標高7m弱の地点から3基検出されている。トレンチ東側が大きく攪乱されており、南側1列分のみ確認された。ほぼ遺跡範囲東限からの確認で、さらに延びる可能性があるが、分布は希薄になるため土坑墓の範囲のほぼ東限に近いものと思われる。

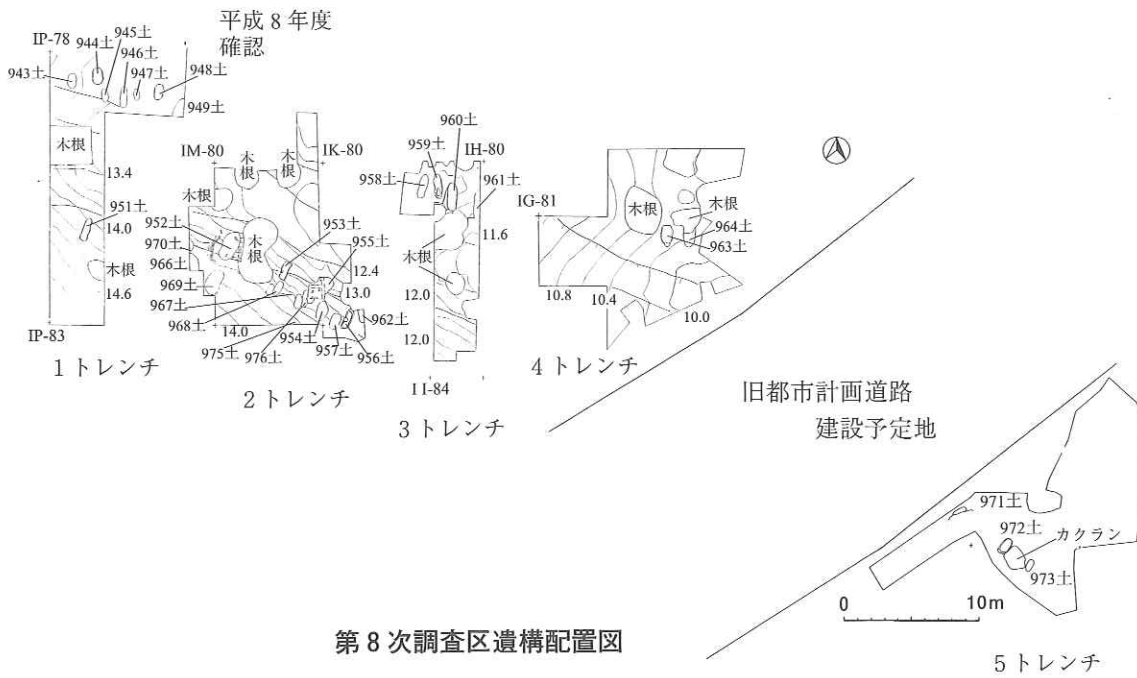
土坑墓の時期は、昨年度検出した土坑墓が縄文時代中期中葉と考えられ、今回の調査区の間にある旧都市計画道路の調査の際検出した、同じ土坑墓列も同時期であることから、同様の時期が考えられる。

第956号土坑はI J-82に位置し、第Ⅱ層を除去後に第Ⅵ層上面で礫が検出され、褐色の楕円形の落ち込みを確認した。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸が1m55cm、短軸が54cmである。壁はやや外側に開きながら直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、列間の中央に向かって5°ほど傾斜している。深さは、南側が46cmで、北側が25cmである。堆積土は、ロームブロックを多量に含み、にぶい黄褐色土で、人為的堆積の可能性が高い。大型の扁平な礫1点が土坑墓中央の堆積土中に、一部が斜めに入り込んだ状態で出土した。本土坑は南側の土坑墓列である。

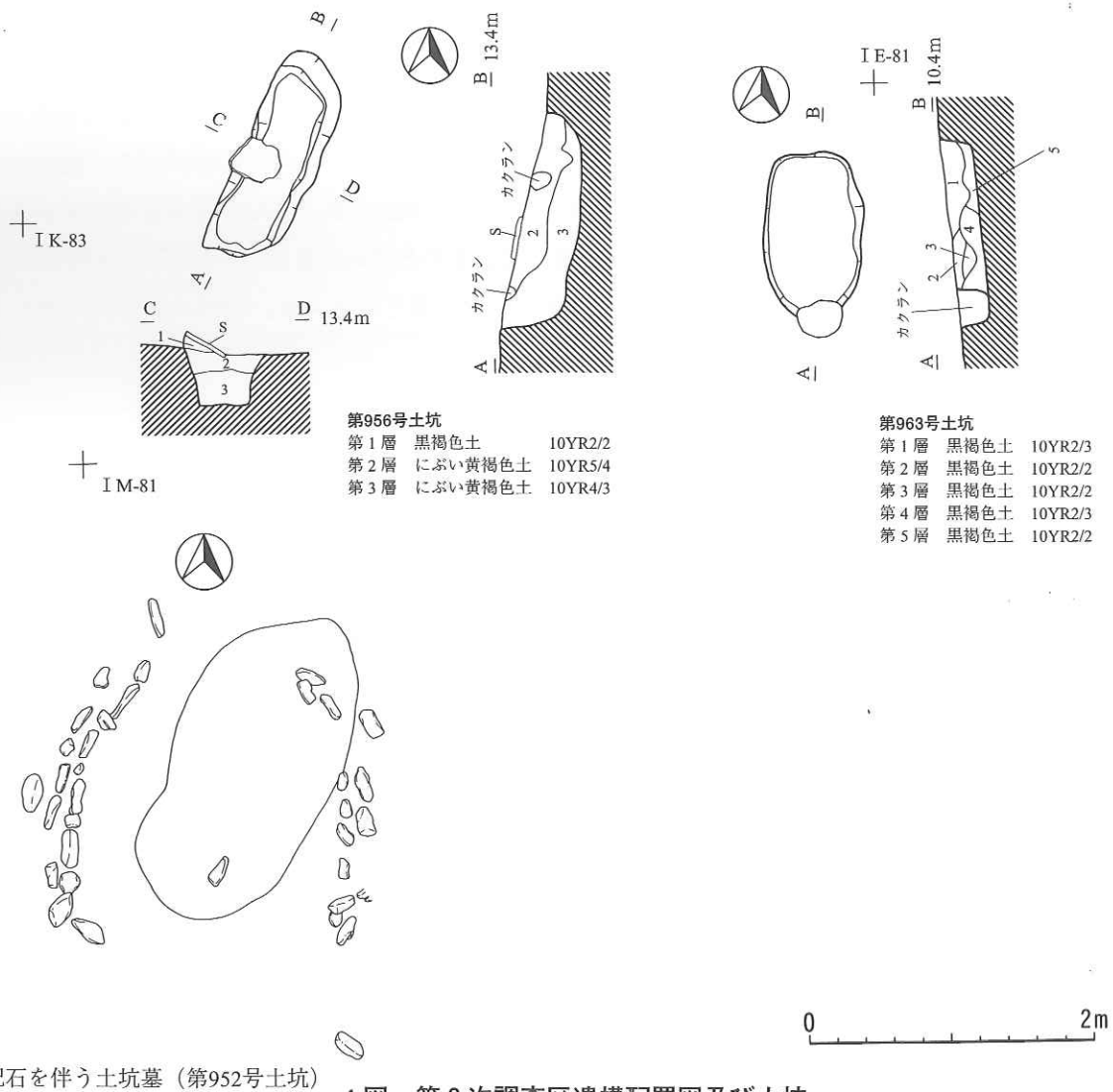
第963号土坑は、I E-81に位置し、第Ⅱ層除去後第Ⅵ層上面で、黒色土の楕円形の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、南側が一部攪乱されている。規模は長軸が推定1m13cm、短軸が70cmである。壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、北側から南側へ傾斜する。堆積土はロームブロックが含まれ、人為的堆積の可能性が高い。遺物は出土しなかった。本土坑は北側の土坑墓列である。

これらの土坑の時期は、確認面、遺構配置などから、縄文時代中期中葉を中心とした時期の可能性が高いと考えられる。

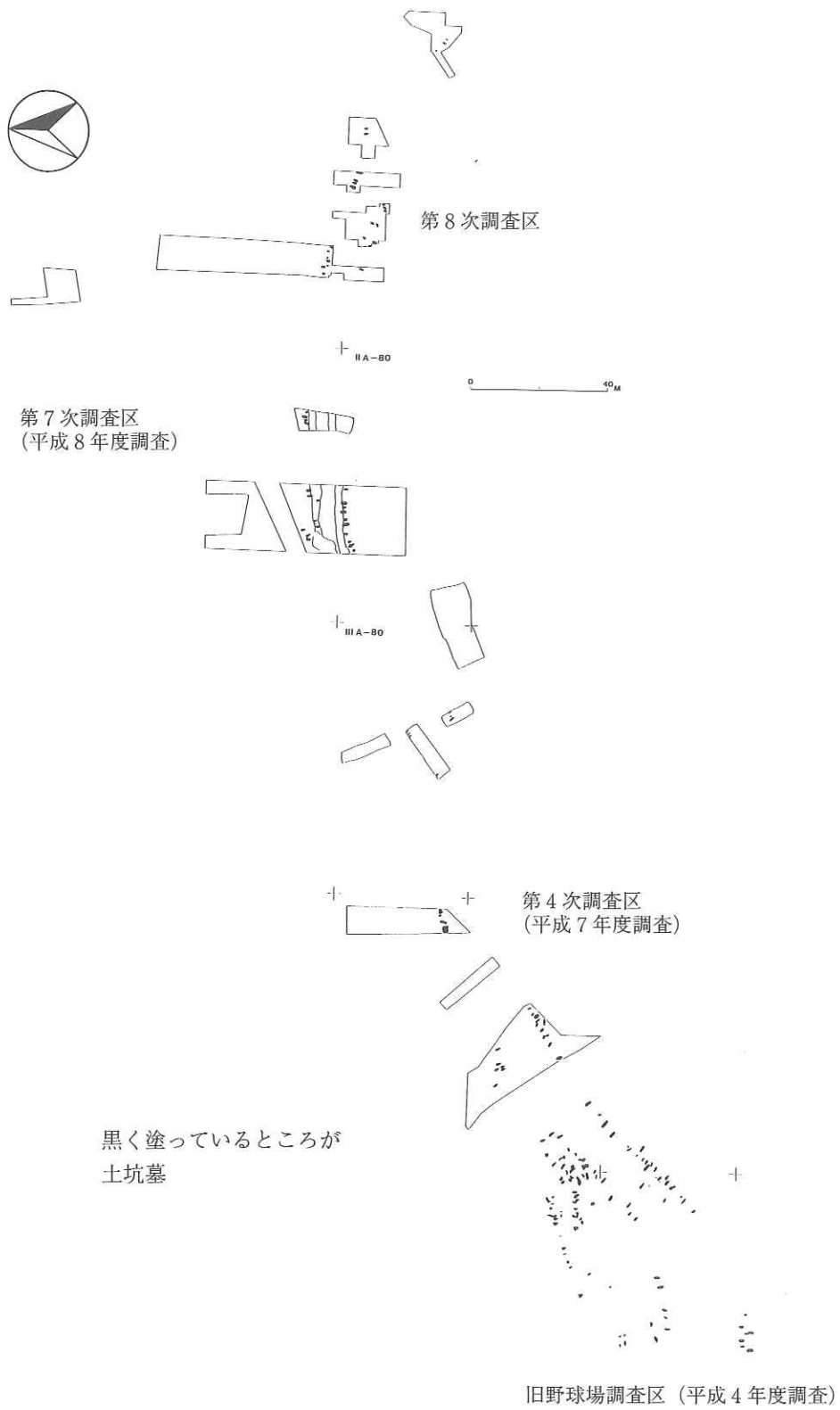
(小笠原 雅行、佐々木 真理子、葛城 和穂)



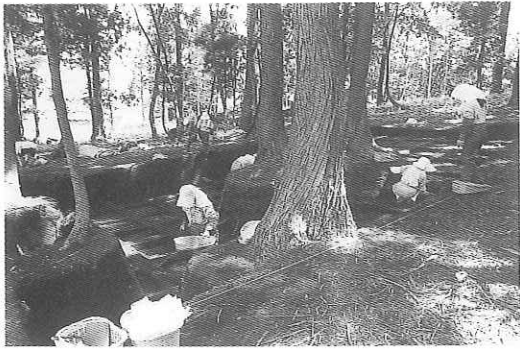
第 8 次調査区遺構配置図



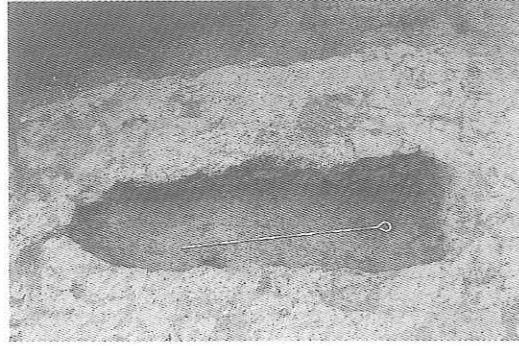
4 図 第 8 次調査区遺構配置図及び土坑



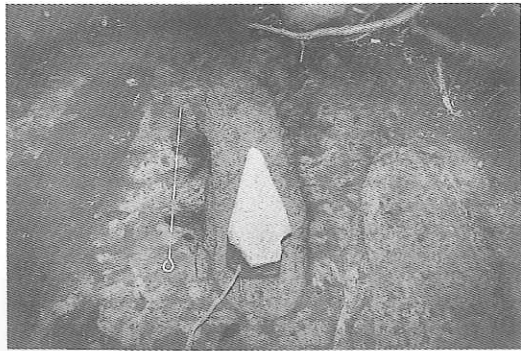
5 図 土坑墓列全体図



作業風景



土坑墓 (第951号土坑)



磔を上面に置く土坑墓 (第959号土坑)



土坑墓列



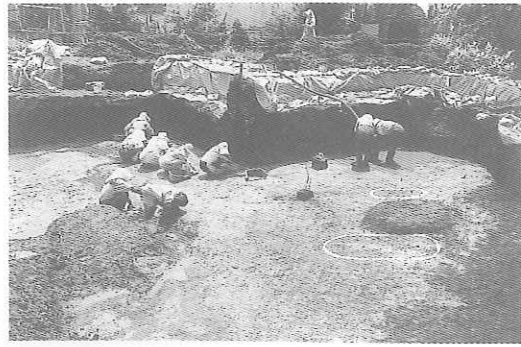
土坑墓確認 (第953号土坑)



第956号土坑



第963号土坑



最東端の土坑墓 (白ワケ内)

6 図 土 坑 墓

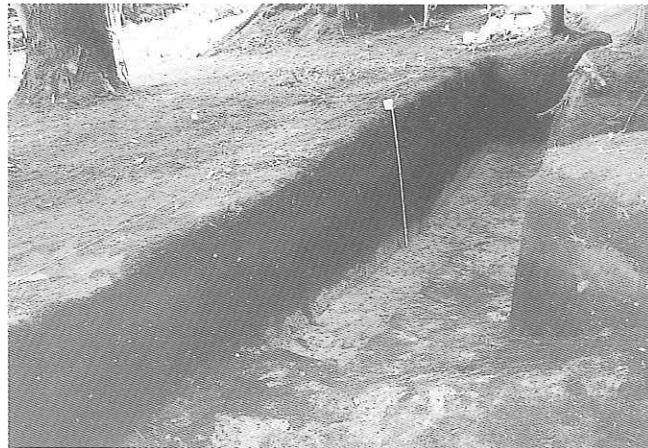
(2) 道 路 跡

2列の土坑墓の間には、道路跡が確認されている。これまでは、台地の尾根筋に当たる部分に造られており、幅12~15m、深さ30~40cmに掘られていることがわかっている。今年度の調査区では、谷に沿って形成されており、全体的に第Ⅲ層・漸移層（第Ⅴ層）が欠如する。幅は上端約9m、下端4.5mである。道路跡には第Ⅱ層の黒色土が上面に直接堆積し、それを除去すると道路跡・土坑墓が確認できる。底面は堅く締まり、ブロック状にヒビ割れた状態で、その間に黒褐色土が入り込む。断面を見ると、ロームブロックを塊状に貼りつけている。谷地形ではあるが、貼られたロームが面的に観察されることから、底面は構築の際に第Ⅲ層・第Ⅴ層を除去し、人為的な作出によるものと考えられる。

道路跡と土坑墓の時間的な前後関係は、掘削された道路跡の両端に土坑墓が造られる。つまり、道路跡を切って土坑墓が掘られていることから、どれだけの時間差を有するかは難しいが、道路跡の構築の後に土坑墓が構築されていると判断される。

出土遺物は、底面直上から縄文時代中期中~後半（円筒上層e式・榎林式）の土器が出土している。また、上面には第Ⅱ層（縄文時代中期末葉以降形成）が堆積する。そのため、道路跡の構築・使用時期は縄文時代中期後半以前のものと判断される。これは、土坑墓の構築時期と矛盾しない。

（小笠原 雅行）



堆 積 状 況



ロームブロックの状況

7 図 道 路 跡

第3節 平安時代の遺構

円形周溝

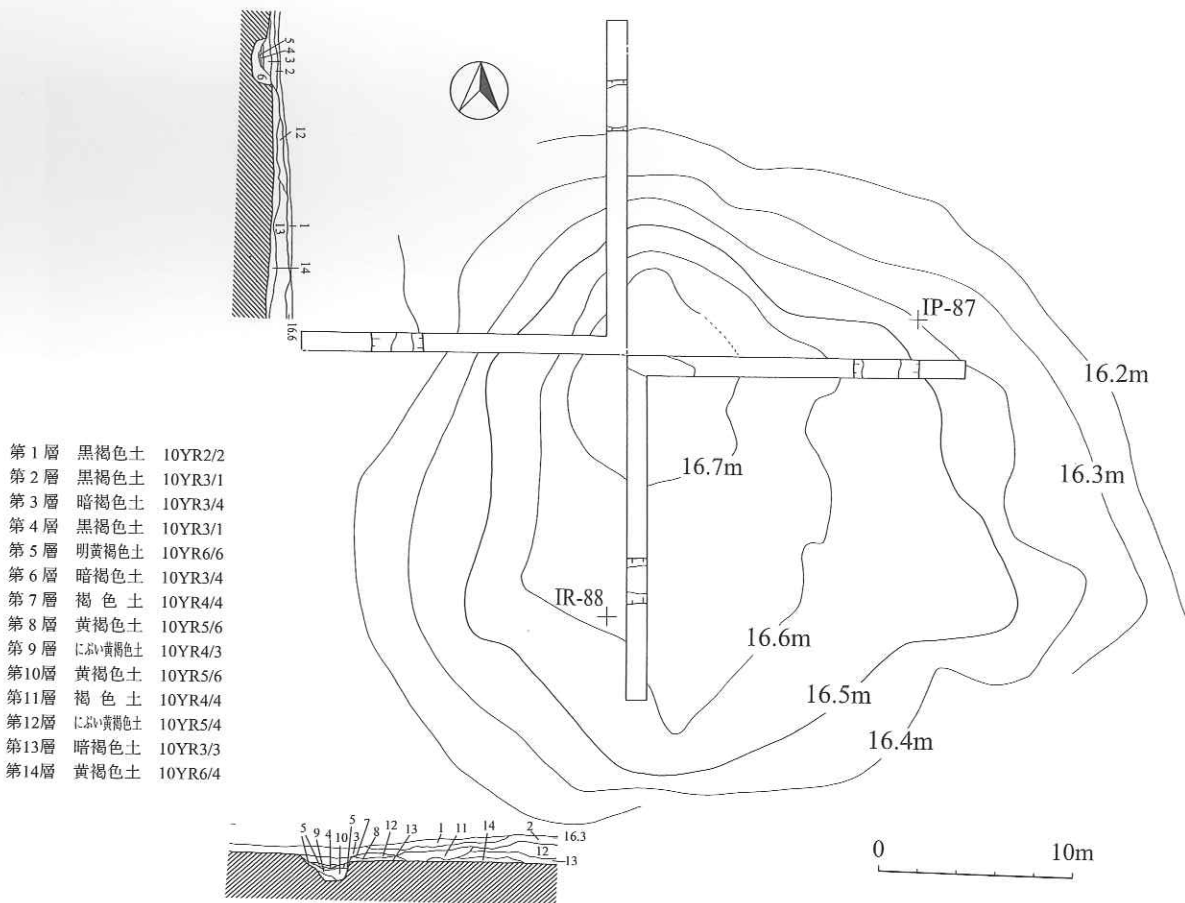
円形周溝を1基確認した。円形周溝については、平成5年度の青森市教育委員会による旧都市計画道路建設予定地調査の際にも2基確認されている。今回調査した場所はすぐ北側に当たり、当時からマウンド状の盛り上がりがあることが指摘されていた。

今回の調査では、マウンドの最も高い部分から、四方に幅50cmのトレンチを入れ、残存状況を把握することにした。その結果、ロームブロックを主体とした厚さ40cmほどのマウンドと、周溝を確認した。マウンド中から施設は確認されないが、中央部に落ち込みが確認された。しかし、周辺は縄文時代の遺構が密集することが予想されること、設定したトレンチが幅50cmと狭いことから、性格・構築時期を把握するところまでは至らなかった。

円形周溝の規模は、外径約13m、内径12mで、周溝の規模は、確認面で幅1.2m、底面では幅80cm、深さ60cmである。底面から上面まで外傾しながら立ち上がる。堆積土中位には十和田a火山灰が厚さ2cmほどで入る。その上部には約3cmの黒色土を挟んで、黒褐色土中に白頭山火山灰が混入する。

出土遺物は、マウンド中から土師器・須恵器の小片が出土した。

(小笠原 雅行)



8図 円形周溝平面図

第Ⅳ章 第9次調査

第1節 調査の概要

第9次調査は、平成8年度に検出した木柱と柱穴周辺の遺構の広がりの確認を目的とし、7月28日から9月10日まで調査を行った。調査面積は88㎡である。

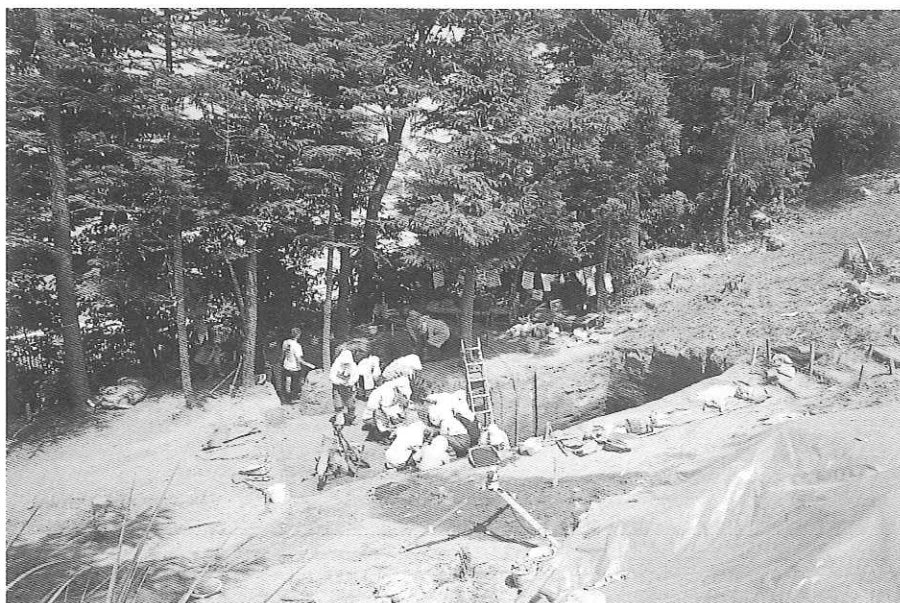
位置は台地北西斜面に当たり、すぐ北側には沖館川が流れる。現地表面での標高が約12mほどの平坦な地形である。平坦面はさらに西側に約40mほど延びるが、そこから南西側に入り込む谷によって開析されている。

旧野球場建設予定地で調査した北の谷から西側の台地北斜面は、大規模な遺物包含層が確認されている(第6 鉄塔地区。10図)。第Ⅲ層に相当する縄文時代前期中葉(円筒下層b式期)から中期後葉(最花式期)にかけてのもので、特に前期末葉(円筒下層d₂式期)から中期後葉期は土砂の廃棄を主体としているため、台地斜面が旧地形から段状に迫り出した状態も部分的に観察される。

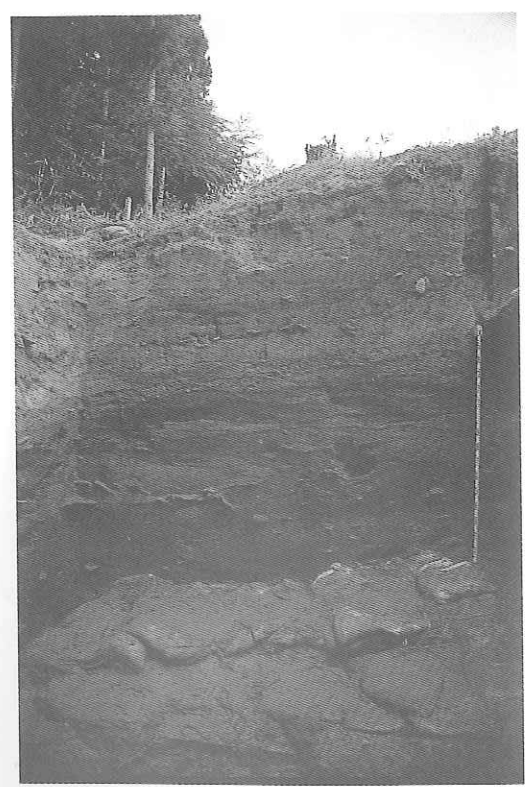
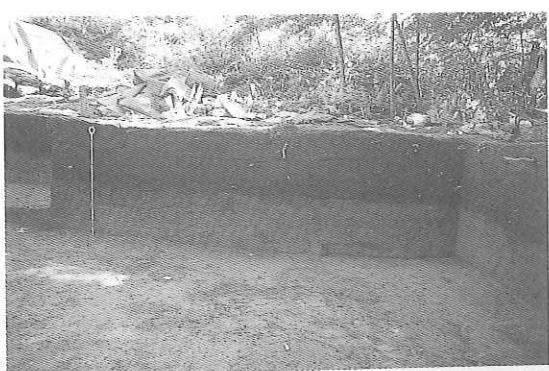
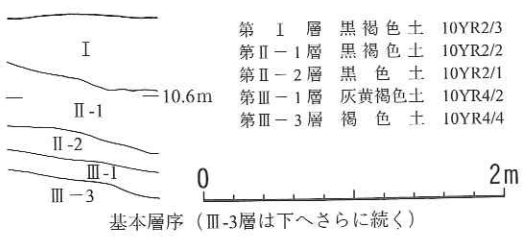
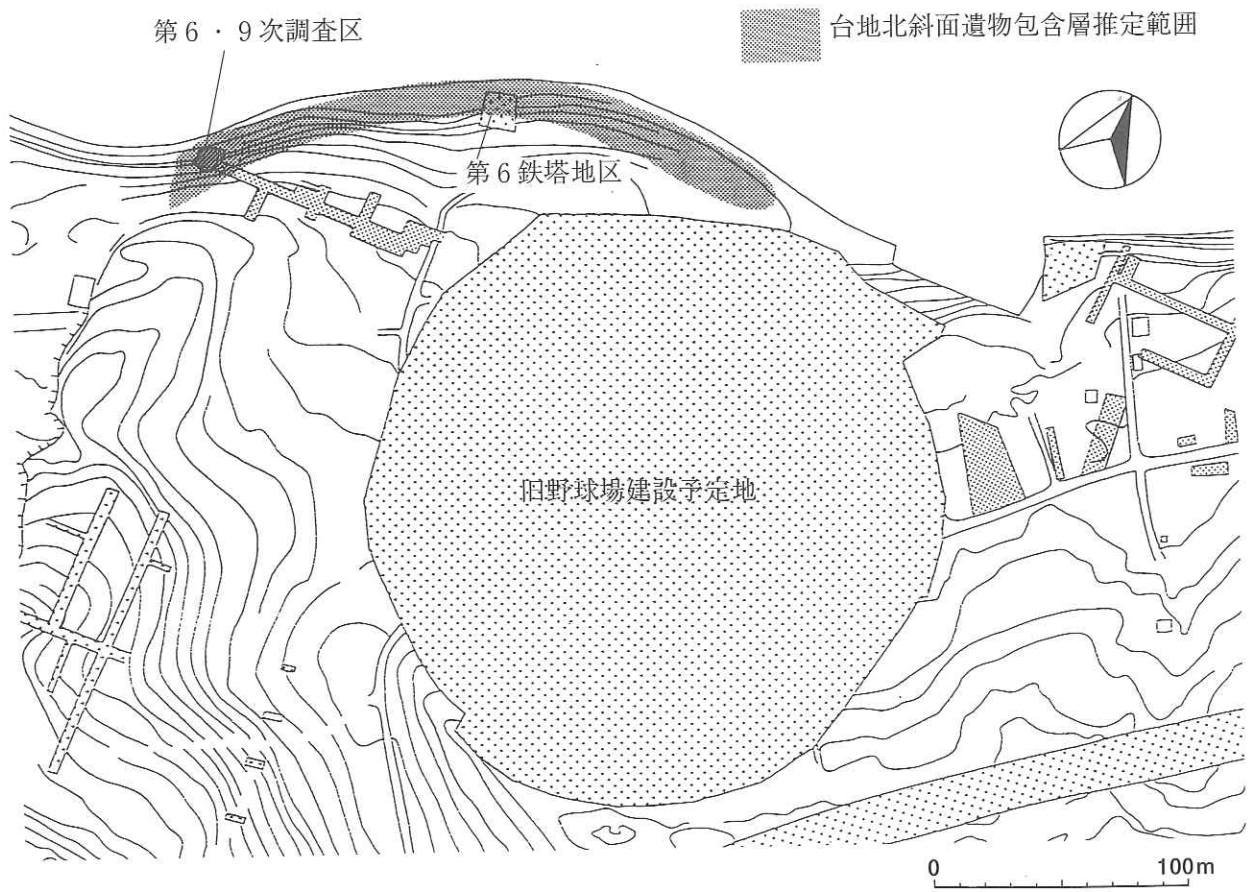
今回調査目的とした木柱と柱穴は、この遺物包含層を掘り込んで構築されていることが、昨年度の調査で確認しており、この柱穴の分布の広がりを確認することを調査の主眼とした。ただし、調査区には、表土及び第Ⅱ層が約1mほど厚く堆積し、第Ⅱ層中には縄文時代中期末葉(大木10式併行期)の遺物が包含されている。柱穴は第Ⅲ層相当の遺物包含層のうち、最花式期の層を除去した段階で、一部が確認される。

遺物包含層以外に検出した遺構は、柱穴40基、焼土1基である。また、昨年度検出した木柱の西側から新たに木柱が1本検出された。遺物は、縄文土器・石器を中心に、段ボール45箱分出土した。

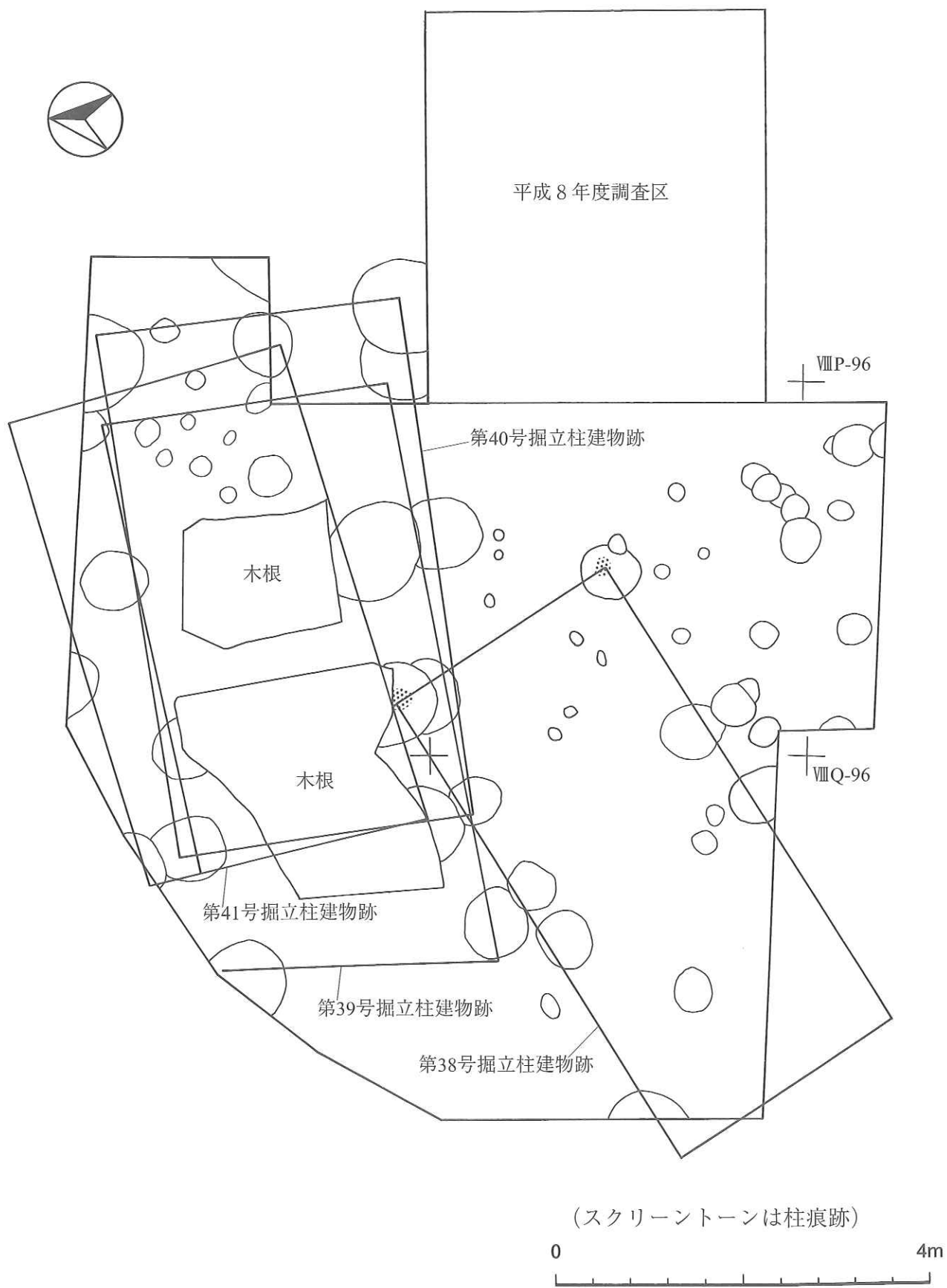
(小笠原 雅行)



9 図 調査区近景



10図 台地北斜面の遺物包含層の推定範囲と基本層序



11図 柱穴配置図

第2節 縄文時代の遺構

1) 掘立柱建物跡

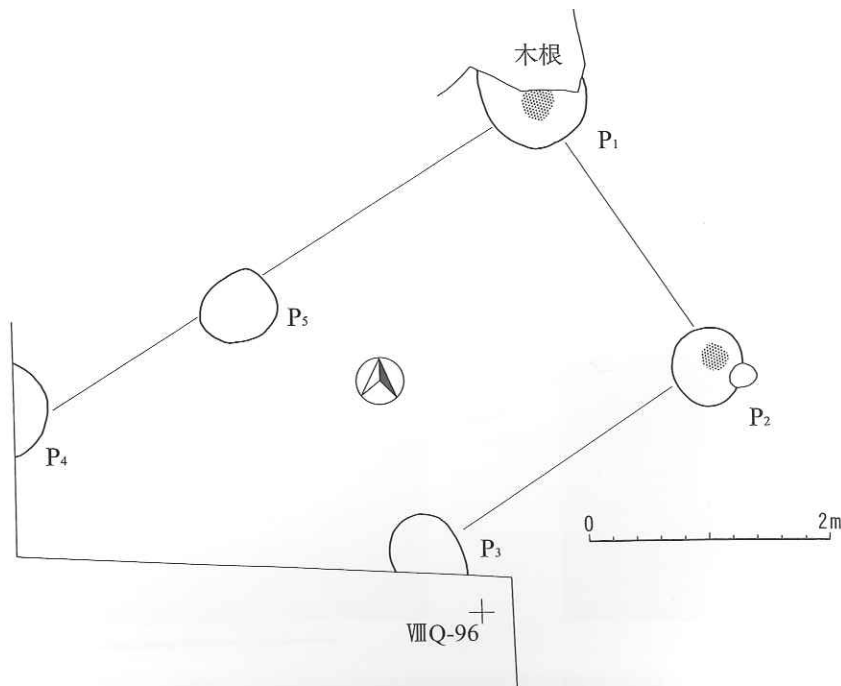
調査区内で確認された柱穴は40基である。これらは、掘り方が径60cm以上の大きなものと、径15cm以下の小さなものに分けられる。前者は19基、後者は21基検出され、前年度に確認した柱穴は前者に含まれる。

規模の大きな柱穴は、配置から1間×2間の構成になるものと考えられる。第Ⅲ層相当の遺物包含層のうち、最花式期の層を除去すると柱穴が一部確認される。ただし、二次堆積土を掘り込んでいるため、確認が非常に難しい。また、円筒上層d式期の遺物包含層を掘り込む。掘り方規模は、58cm～120cmである。調査区内では、4棟分の掘立柱建物跡が想定でき、柱間寸法は2m80cm前後と、3m50cm前後のものがある。

昨年度確認した木柱はクリを使用しており、太さは直径約60cmほどと考えられる。今年度その西側約30cmほど離れて、新たに木柱を1本確認した。樹種は隣接するものと同様クリである。太さは昨年度確認したものと同規模と見られる。この2本の柱穴は重複しており、昨年度検出した柱穴が新しい。

第38号掘立柱建物跡はⅧP・Q-95に位置し、最花式期の包含層を除去後に、複数の円形の落ち込みを確認した。建物跡の平面形は1間×2間で、柱間寸法は東西方向、南北方向ともに約2m80cmである。柱穴の平面形は、円形または不整形円形を呈する。各柱穴の径はP₁…80cm、P₂…60cm、P₃…60cm、P₄…50cm（確認分）、P₅…62cmである。このうちP₁とP₂については平面形を確認後、掘り下げて柱痕跡を確認した。柱痕跡の規模は径がP₁…22cm、P₂…20cmである。

出土遺物は、柱穴から縄文土器片が少量出土した。時期は確認面の層位から、縄文時代中期中葉～後葉（円筒上層e式～最花式期）と考えられる。（小笠原 雅行）



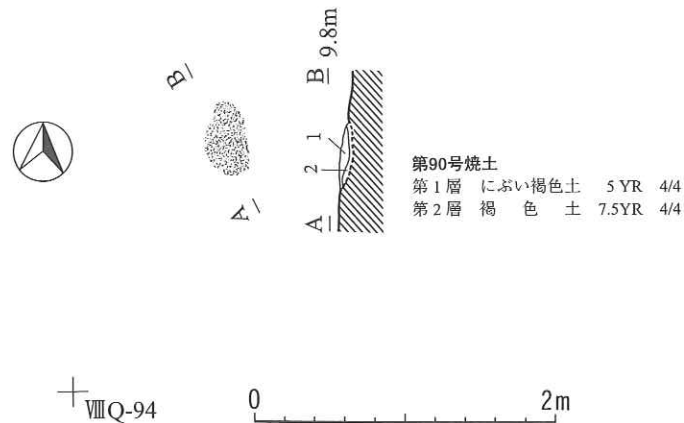
12図 第38号掘立柱建物跡

2) 焼土

焼土を1基検出した。周辺は二次堆積ロームを主体とした遺物包含層で、層中には部分的に炭化物や土器が集中し、層をなす部分も見られる。それとともに、焼土が粒状・ブロック状に含まれる部分があるが、ここではそれらは除外した。本遺構は火焼面があること、焼土が集中し散在していないこと、焼土の粒径・色調が層として揃っていることなどから、遺構として扱った。

第90号焼土は、ⅧP-93に位置し、第Ⅲ層に相当する遺物包含層の精査中に確認した。周辺に柱穴・周溝などが確認されなかったことから、焼土単独のものだと判断した。長径約51cmの不整楕円形に広がる。堆積土は厚さが11cmで、2層に分層され、いずれも焼土が主体となる。出土遺物は無いが、最花式期の遺物包含層中で確認され、周辺からも最花式期の土器が出土していることから、同様の時期と考えられる。

(小笠原 雅行)



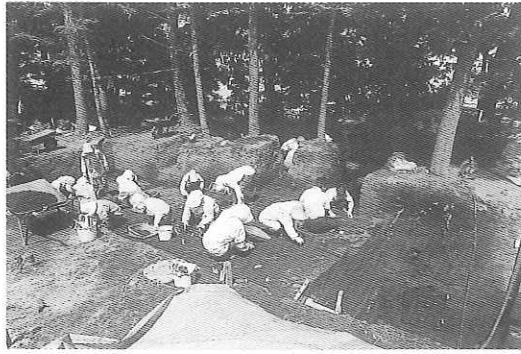
13図 第90号焼土

3) 遺物包含層

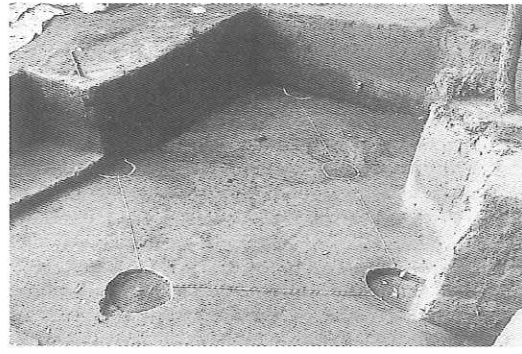
第Ⅱ層中で縄文時代中期末（大木10式併行期）の遺物包含層を確認した。なお、第Ⅲ層に相当する中期後葉以前の包含層は、中期後葉と考えられる柱穴の確認を主目的としたため、掘り下げはほとんどしていない。

第Ⅱ層は、調査区全体に広がり、厚さ82cm～1m24cmで、西側・北側の斜面下部にいくにしたがって厚くなる。第Ⅱ層は2層に分層でき遺物の出土量は、段ボール箱で12箱分である。遺物の出土状況は廃棄と考えられ、土器は完形品は無く、いずれも破片である。石器は石鏃、石槍、石匙、磨製石斧などがある。その他に土・石製品として、ミニチュア土器、有孔石製品が1点ずつ出土した。

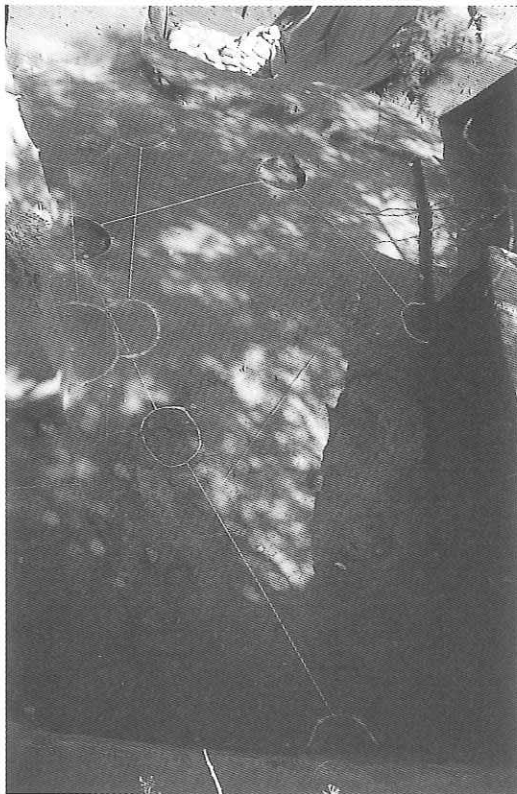
(小笠原 雅行)



作業風景



第38号掘立柱建物跡



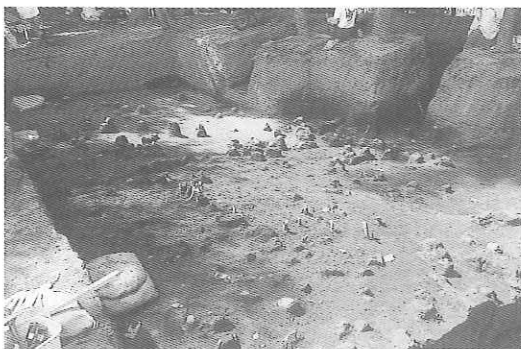
柱穴配置



柱痕跡確認



第90号焼土



包含層遺物出土状況



包含層遺物出土状況

14図 第9次調査区遺構・遺物検出状況

第V章 第10次調査

第1節 調査の概要

南地区における集落の広がりの変遷をつかむため、平成8年度から県総合運動公園西駐車場の北～北東の地区の調査を行っており、8月19日から11月14日までの期間で、昨年度遺構確認を行った地点を含め4,720㎡調査した。出土遺物は縄文土器や石器などダンボール箱で24箱分であり、遺構や遺物の多くは縄文時代中期中葉の円筒上層e式期のもので、三内丸山遺跡の最盛期に南地区へ集落が拡大することが明らかになった。

層序は基本的には北地区と同一であるが、平坦部や傾斜の上方では層厚が薄い。第II層は調査区北東側の緩斜面と調査区南端で確認したが、層厚は薄く、遺構は全て第III層で確認した。

調査区は東へ伸びる尾根と尾根の北側の傾斜面からなり、南側は平坦になっている。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡24棟、竪穴遺構17基、土坑79基、埋設土器1基、焼土1基を確認した。うち、竪穴住居跡7棟、竪穴遺構3基、土坑22基、埋設土器1基、焼土1基を精査した。

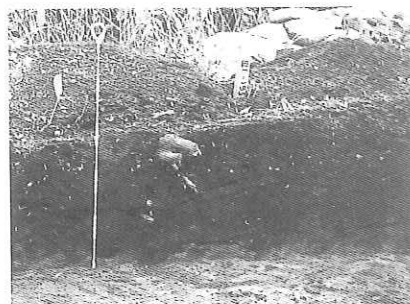
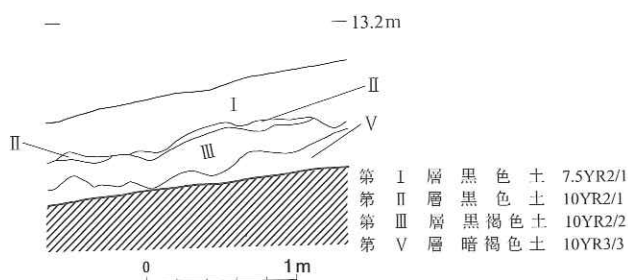
竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、埋設土器については、第2節に概要を記載する。竪穴遺構としたものは、かなりの深さがあり炉の無いこと、テラスや柱穴が存在するものがある等、三内丸山遺跡でこれまで調査された多くの竪穴住居跡や貯蔵穴と異なるものである。確認のみの遺構についても堆積土における黒色土の落ち込み具合や堆積土を構成するローム質土の観察から、かなりの深さが予想されるものについては竪穴遺構とした。

遺構は、種類ごとにまとまりを持った分布を示している。竪穴住居跡は調査区北側の緩斜面に多く、直径が3m前後のものが多い。竪穴遺構は、調査区中央の尾根筋から北側の傾斜面にかけて分布する。土坑は、調査区南側の平坦面と北側の傾斜面に分布している。

竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑は中期中葉の円筒上層e式期のものが多く、中期後半の榎林式期の竪穴住居跡もある。一方、埋設土器は晩期のものであり、土器内部から赤色顔料を確認した。

その他、弥生時代後期の天王山式期の土坑を1基、平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基、溝跡2条を確認した。また、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑3基、柱穴97基を確認したが、そのほとんどは平安時代よりもさらに新しい時代に属するものと考えられる。

(斎藤 岳)



15図 第10次調査区基本層序



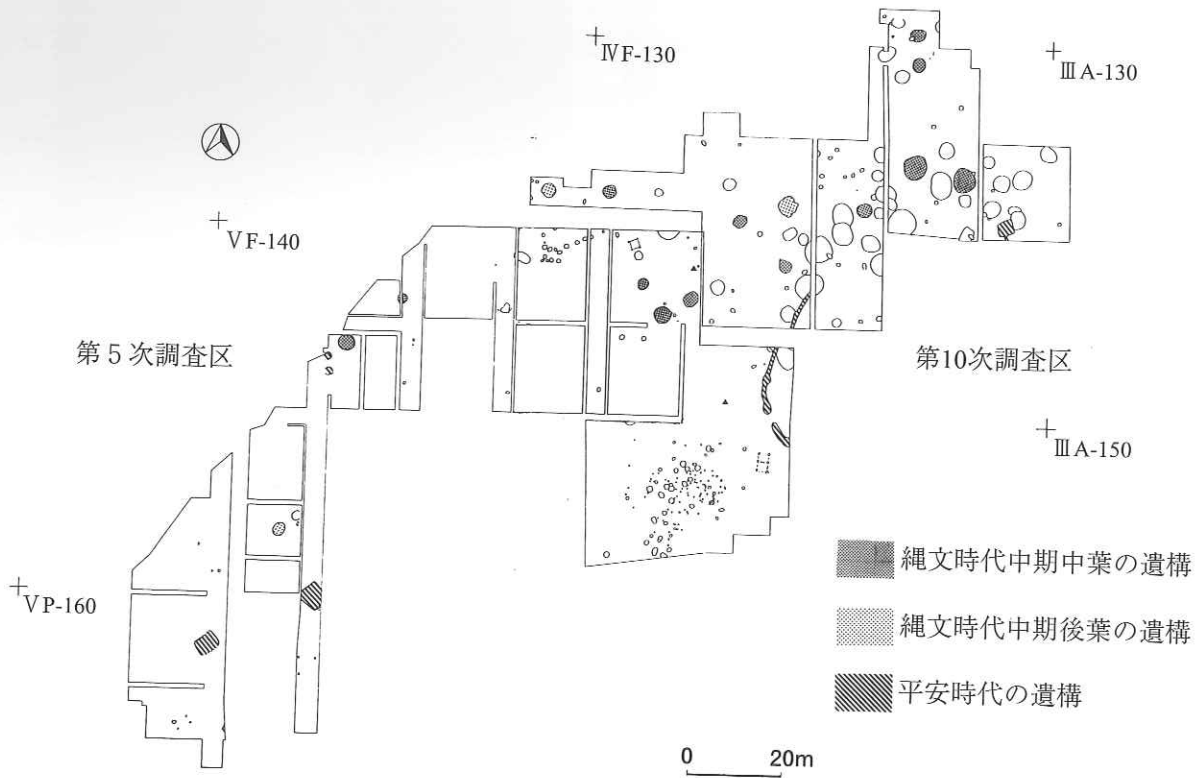
調査区遠景



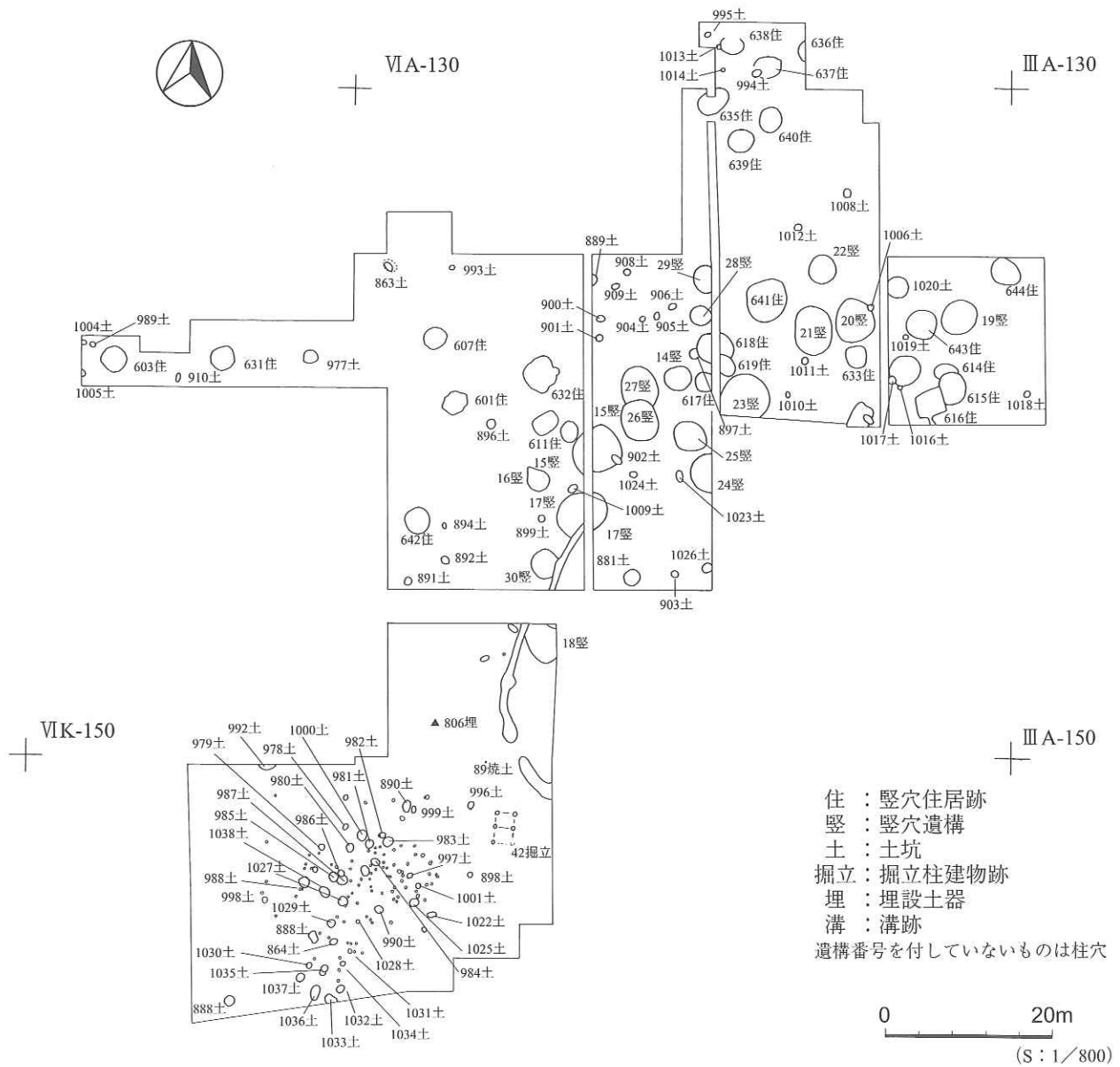
見学風景



作業風景



16図 調査風景及び第5次・第10次調査区時期別遺構分布状況



17図 第10次調査区遺構配置図

第2節 縄文時代の遺構

1) 竪穴住居跡

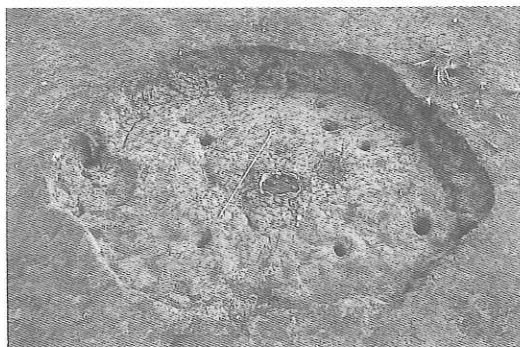
今回確認された竪穴住居跡は24棟であり、その内7棟を精査した。これらは長軸が3～4mの小型な一群と、長軸5m10cm、深さ1m36cmの第641号住居跡のように深さのあるものに分類される。前者は、調査区北側の傾斜面に広く分布している。平面形は、円形～楕円形および隅丸方形である。柱穴は4本の支柱穴を配する場合が多い。炉は土器埋設炉が多いが、地床炉も見られる。円筒上層e式期のものが中心であるが、一部には榎林式期のものも存在する。これらは集落が最も拡大した、縄文時代中期中葉から後葉のものである。一方、後者のような深く掘り込まれた住居は、今回の調査で新しく検出されたものである。これも円筒上層e式期と考えられ、先の住居群と併存していたと考えられるが、その性格および分布などについては今後の課題である。

第601号住居跡は、ⅢQ・R-139に位置し、第Ⅲ層で楕円形の黑色土の落ち込みとして確認した。平面形は隅丸方形で、長軸3m18cm、短軸2m60cm、床面積は5.04㎡である。床面上に9個の柱穴を確認した。また、壁溝は南～南西側および東側に巡り、幅約7cm、深さ約4cmである。床面はほぼ中央に土器埋設炉を検出した。使用された土器は直径33cmの深鉢である。付属施設として、北東部に張り出しが確認され、その中に、これにともなうと考えられるくぼみも検出された。遺物は堆積土中から土器、石器が出土している。時期は、堆積土下部の出土遺物から円筒上層e式期と考えられる。

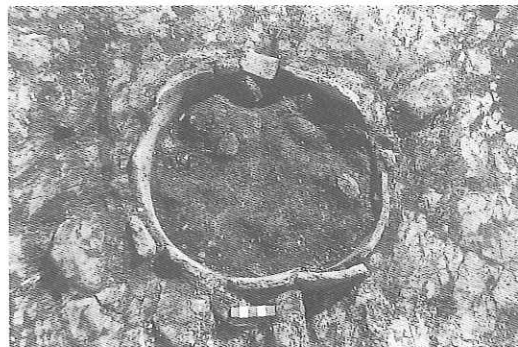
第632号住居跡は、ⅢO-138に位置し、第Ⅲ層で楕円形の黑色土の落ち込みとして確認した。平面形は隅丸方形で、長軸4m20cm、短軸3m98cm、床面積は9.91㎡である。床面はほぼ平坦であり、中央から地床炉が検出された。壁溝は幅10cm、深さ9cmで、東側及び南西側の一部を除き巡る。柱穴は床面上に10個確認された。付属施設として、東側、南東側の2ヶ所に張り出しを確認した。堆積土中からは、土器、コハク原石2点、115点の石皿破片など多数の遺物が出土している。時期は床面直上の出土遺物から、榎林式期と考えられる。

第641号住居跡は、ⅢH-138に位置し、第Ⅲ層で円形の黑色土の落ち込みとして確認した。平面形はほぼ不整円形で、長軸5m10cm、短軸4m90cm、床面積は13.0㎡である。壁は外傾しながら階段状に立ち上がり、残存壁高は最大で1m36cmである。床面は平坦であり、中央には地床炉が検出された。また床面からは4個の柱穴が確認され、いずれにも柱痕跡が認められた。柱穴の深さはそれぞれP₁…38cm、P₂…18cm、P₃…45cm、P₄…57cmである。壁溝は確認されなかった。堆積土中からは、多数の土器、石器及び石製品が出土している。時期は堆積土下部から出土した土器から、円筒上層e式期と考えられる。

(葛城 和穂)

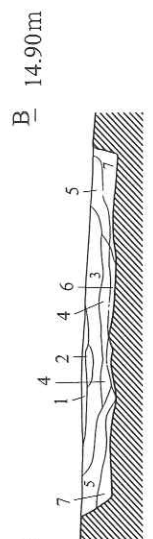
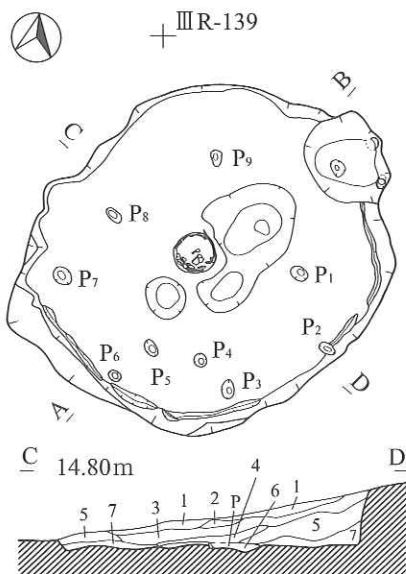


第601号住居跡完掘状況

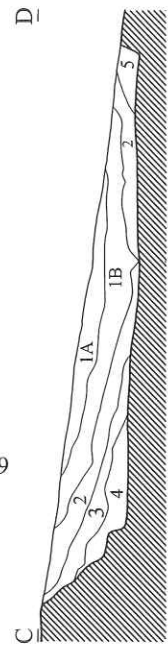
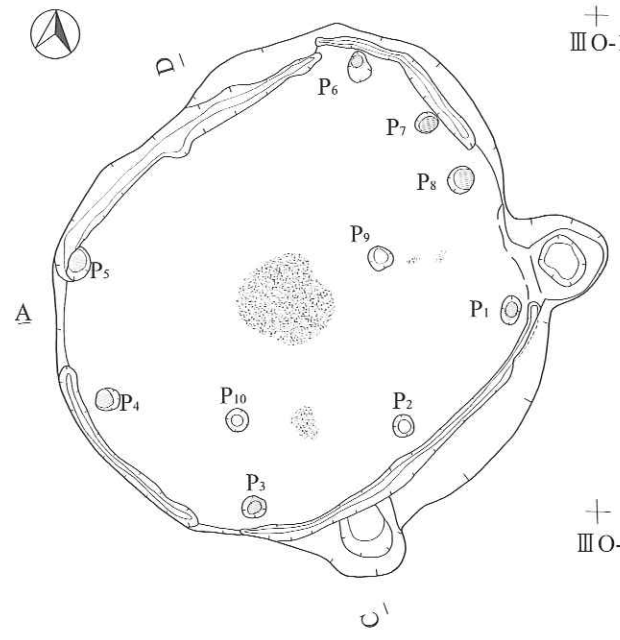
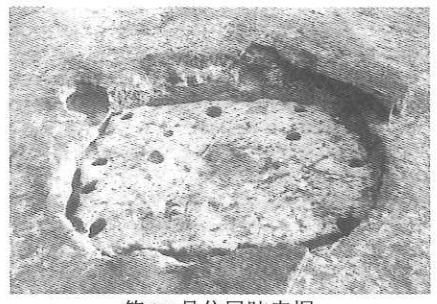


第601号住居跡土器埋設炉

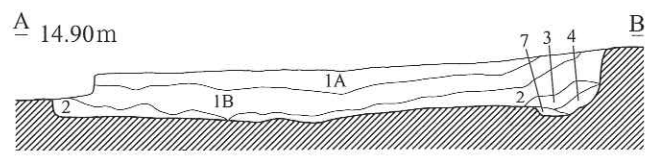
18図 第601号住居跡



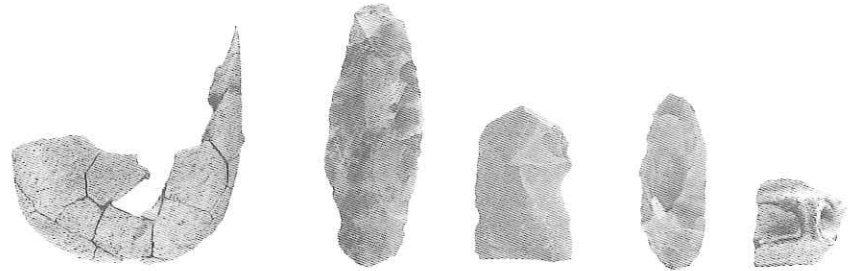
- 第601号住居跡
- | | | |
|-----|------|----------|
| 第1層 | 黑褐色土 | 10YR2/3 |
| 第2層 | 褐褐色土 | 7.5YR4/6 |
| 第3層 | 黑褐色土 | 10YR2/2 |
| 第4層 | 黑褐色土 | 10YR2/1 |
| 第5層 | 褐褐色土 | 10YR3/3 |
| 第6層 | 黑褐色土 | 10YR2/1 |
| 第7層 | 黑褐色土 | 10YR2/3 |



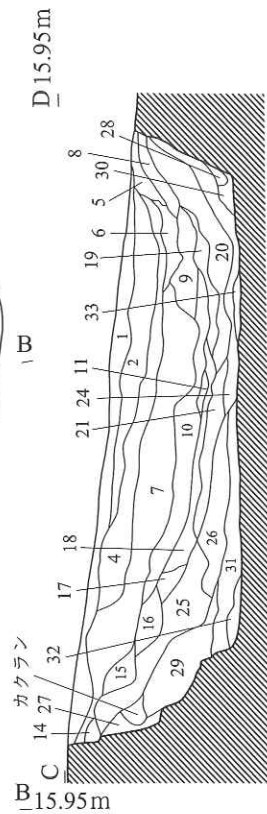
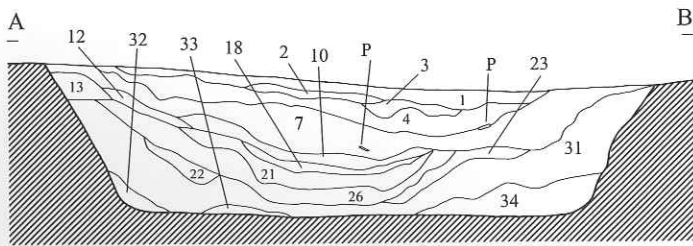
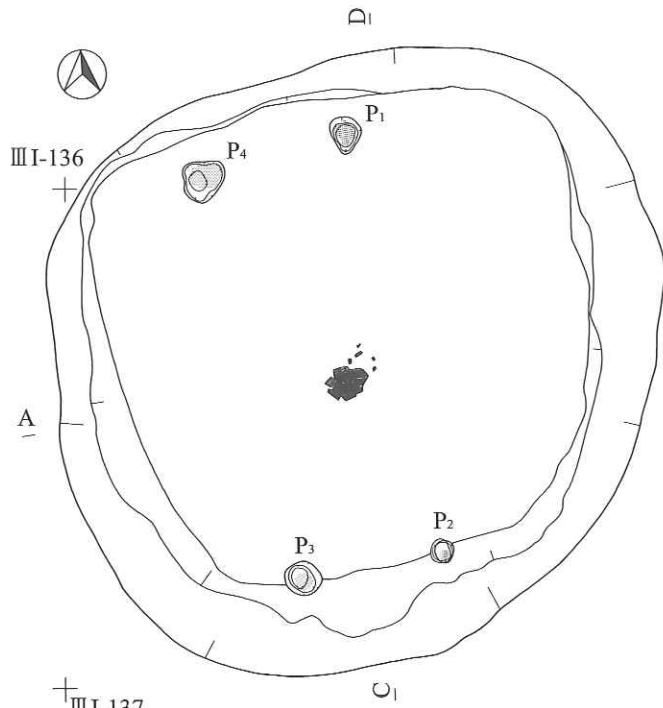
- 第632号住居跡
- | | | |
|------|------|------------|
| 第1A層 | 黑色土 | 7.5YR1.7/1 |
| 第1B層 | 黑色土 | 7.5YR1.7/1 |
| 第2層 | 黑色土 | 10YR1.7/1 |
| 第3層 | 黑色土 | 10YR1.7/1 |
| 第4層 | 黑色土 | 10YR2/1 |
| 第5層 | 黑褐色土 | 10YR3/2 |
| 第6層 | 褐色土 | 10YR4/4 |
| 第7層 | 褐色土 | 10YR4/6 |



0 2m



19图 第601・632号住居跡

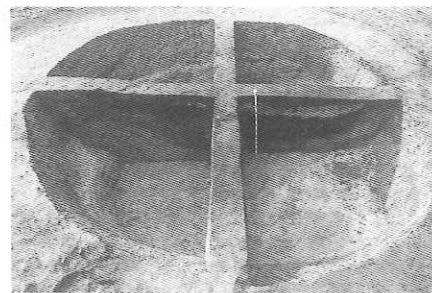


第641号住居跡

第1層	黒褐色土	10YR2/3
第2層	黄褐色土	10YR5/6
第3層	褐色土	10YR6/4
第4層	黒褐色土	10YR2/1
第5層	暗褐色土	10YR3/3
第6層	黒褐色土	10YR2/2
第7層	にぶい黄褐色土	10YR4/3
第8層	黄褐色土	10YR4/6
第9層	黒褐色土	10YR3/1
第10層	褐色土	10YR4/4
第11層	褐色土	10YR4/4
第12層	黄褐色土	10YR5/6
第13層	暗褐色土	10YR3/3
第14層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第15層	褐色土	10YR4/4
第16層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第17層	明黄褐色土	10YR6/6
第18層	黒褐色土	10YR2/2
第19層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第20層	黄褐色土	10YR5/6
第21層	褐色土	10YR4/6
第22層	にぶい黄褐色土	10YR4/3
第23層	黒褐色土	10YR3/1
第24層	黒褐色土	10YR3/2
第25層	明黄褐色土	10YR6/8
第26層	黄褐色土	10YR5/8
第27層	黄橙色土	10YR7/8
第28層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第29層	明黄褐色土	10YR6/6
第30層	黒褐色土	10YR3/2
第31層	明黄褐色土	10YR6/6
第32層	浅黄褐色土	10YR8/3
第33層	褐色土	10YR4/6
第34層	明黄褐色土	10YR6/6



第641号住居跡完掘



第641号住居跡堆積状況



堆積土出土遺物

20図 第641号住居跡

2) 竪穴遺構

竪穴遺構は、17基検出された。ⅡE-135からⅢP-150まで、主に調査区中央の平坦面から北側の斜面にかけて分布している。その範囲はさらに東側に延びる可能性がある。いずれも第Ⅲ層を精査中に黒色土の落ち込みとして確認した。平面形が円形ないし隅丸方形で、規模の大きなものでは長軸が6 m42cm、短軸が6 m11cm、小さなものでは長軸が2 m54cm、短軸が2 m26cmである。うち3基について精査を行った。

精査した遺構の時期は、いずれも堆積土から出土した土器により円筒上層e式期のものと考えられ、他の14基についてもそれに近い時期と考えられる。竪穴遺構の性格は、出土遺物や調査の状況からは明確にできず、今後さらに検討する必要がある。

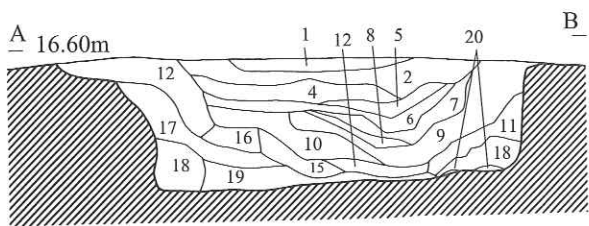
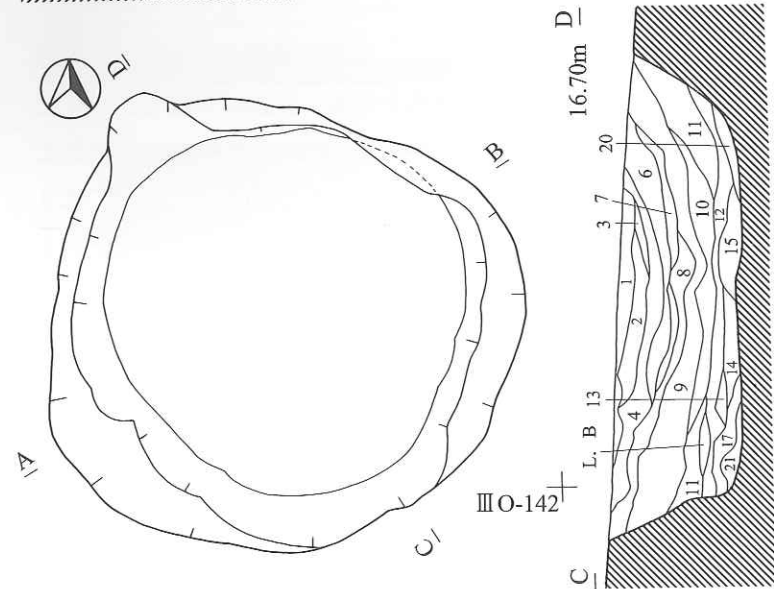
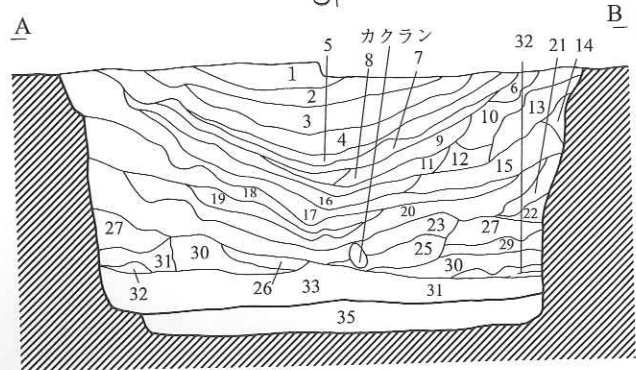
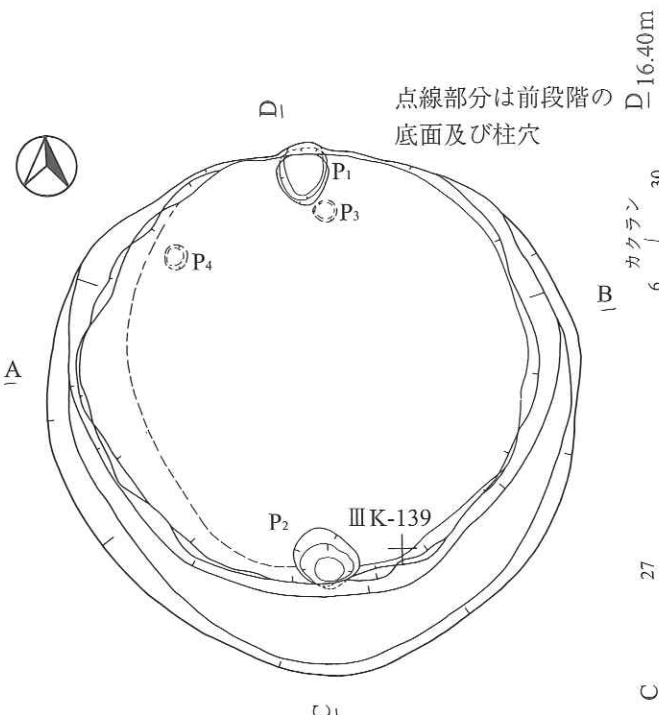
第14号竪穴遺構は、ⅢJ・K-138~139に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸が2 m70cm、短軸は2 m60cm、底面積は5.67m²である。壁の南側にはテラスと考えられる張り出しがある。壁は垂直に立ち上がり、深さ1 m90cmである。底面は平坦である。柱穴が北西側に2個確認された。径は2個とも13cm前後で深さはP₃…16cm、P₄…16cmである。

また、底面に厚さ約40cmにロームを貼り、壁面西方向には拡張がみられる。拡張後の規模は長軸3 m54cm、短軸3 m44cm、底面積が6.46m²である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ1 m59cmである。底面は平坦である。この柱穴が南北方向の壁際に向かい合って2本配置され、柱痕跡は直立した状態で確認された。規模は直径が50cm前後で、深さはP₁…43cm、P₂…50cmである。また壁には柱の接触による抉れと考えられる痕跡が確認される。堆積土は上半が黒色土層、下半が炭化物・粘土塊などが多量に混入したローム主体層となっている。出土遺物は、下半のローム主体層にはほとんどみられず、上半の黒色土層より円筒上層e式期の遺物がまばらに出土する。

第16号竪穴遺構はⅢO-141~142に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸が3 m26cm、短軸が3 m18cm、底面積が4.65m²である。壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。床面は平坦で、やや堅緻である。周囲には幅約40cm、深さ約20cmのテラスを伴う。堆積土は第1層から第7層では黒色土及び暗褐色土、第8層以下は炭化物・焼土・ローム塊を多く含むため第7層までは自然堆積、第8層以下は人為的堆積と考えられる。出土遺物は堆積土中から円筒上層e式期の遺物がまばらに出土する。

第20号竪穴遺構は、ⅢE-136~137に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸が5 m25cm、短軸が4 m35cm、面積が9.40m²である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さ97cmである。底面は平坦である。周囲には幅50cm、深さ30cmのテラスを伴い、その部分にはピットが16個確認された。直径は7cm前後のものが多く、深いもので18cm、浅いもので4cmである。16個中11個の掘り方が中央に傾いている。堆積土は第1・2層では黒色土が主体となっている。第3層以下は、ローム塊や粘土が主体となっており、炭化物・焼土などが多量に混入する。第4層では焼土層が厚さ3cmで堆積する。そのため第1・2層は自然堆積、第3層以下は人為堆積の可能性が高い。出土遺物は第4層上面から復元可能な土器も含め、遺物が多量に出土する。その他の層からは、ごく少量の遺物が出土する程度である。これらの出土遺物の時期は円筒上層e式期である。

(佐々木 真理子)



第14号 豎穴遺構

第1層	黄褐色土	10YR4/3
第2層	黒褐色土	10YR2/3
第3層	黄褐色土	10YR5/6
第4層	黒褐色土	10YR2/1
第5層	暗褐色土	10YR4/4
第6層	暗褐色土	10YR3/3
第7層	暗褐色土	10YR3/1
第8層	暗褐色土	10YR2/3
第9層	暗褐色土	10YR3/4
第10層	暗褐色土	10YR3/3
第11層	暗褐色土	10YR2/1
第12層	暗褐色土	10YR4/4
第13層	黄褐色土	10YR4/3
第14層	黄褐色土	10YR5/6
第15層	黄褐色土	10YR3/4
第16層	黄褐色土	10YR3/2
第17層	暗褐色土	10YR3/4
第18層	暗褐色土	10YR4/6
第19層	暗褐色土	10YR4/6
第20層	暗褐色土	10YR4/4
第21層	黄褐色土	10YR5/6
第22層	黄褐色土	10YR5/6
第23層	黄褐色土	10YR4/6
第24層	黄褐色土	10YR5/8
第25層	黄褐色土	10YR4/4
第26層	黄褐色土	10YR4/6
第27層	黄褐色土	10YR7/4
第28層	黄褐色土	10YR3/4
第29層	黄褐色土	10YR6/3
第30層	黄褐色土	10YR5/8
第31層	黄褐色土	10YR6/3
第32層	黄褐色土	10YR5/8
第33層	暗褐色土	10YR3/3
第34層	黄褐色土	10YR7/8
第35層	黄褐色土	10YR5/6

P₁ 堆積土
第1層 黄褐色土 10YR5/8

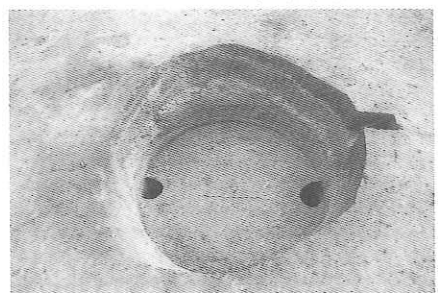
P₂ 堆積土
第1層 黄褐色土 10YR5/8

第16号 豎穴遺構

第1層	黄褐色土	10YR4/4
第2層	黄褐色土	10YR4/3
第3層	暗褐色土	10YR3/4
第4層	暗褐色土	10YR5/8
第5層	暗褐色土	10YR3/4
第6層	暗褐色土	10YR4/6
第7層	暗褐色土	10YR4/6
第8層	暗褐色土	10YR4/6
第9層	暗褐色土	10YR4/6
第10層	暗褐色土	10YR2/2
第11層	暗褐色土	7.5YR5/6

同完掘

第12層	暗褐色土	10YR4/4
第13層	暗褐色土	10YR4/3
第14層	暗褐色土	10YR3/4
第15層	暗褐色土	10YR5/8
第16層	暗褐色土	10YR3/4
第17層	暗褐色土	10YR4/6
第18層	暗褐色土	10YR4/6
第19層	暗褐色土	10YR4/6
第20層	暗褐色土	10YR2/2
第21層	暗褐色土	7.5YR5/6



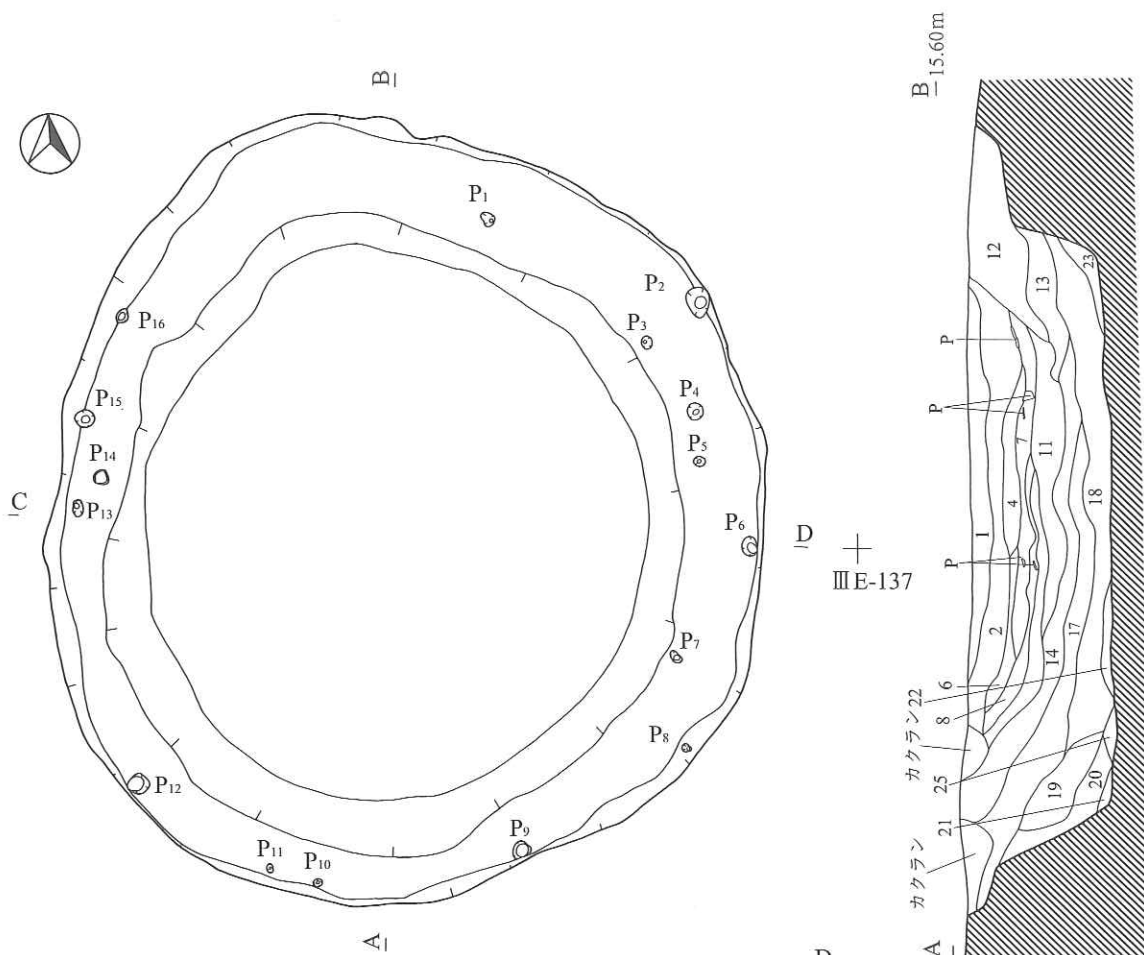
第14号 豎穴遺構



第16号 豎穴遺構 堆積状況

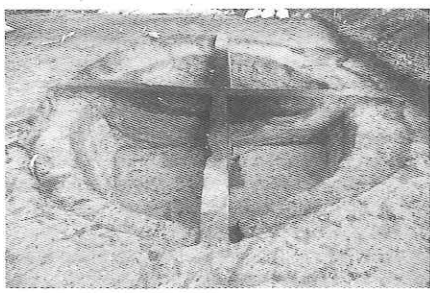


21図 第14号・第16号 豎穴遺構

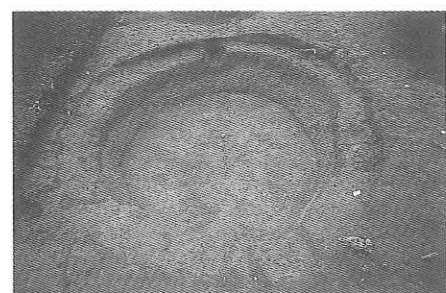


第20号竖穴遺構

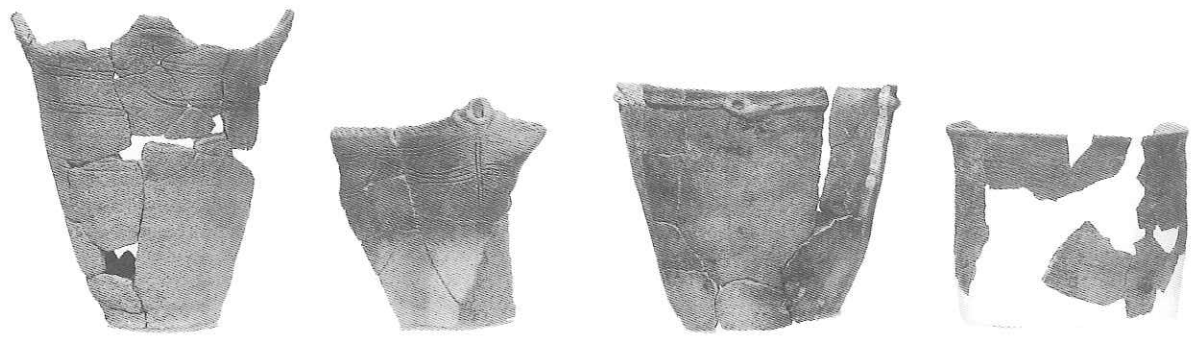
第1層	黒色土	10YR2/1
第2層	黒褐色土	10YR2/3
第3層	褐色土	10YR4/6
第4層	明赤褐色土	5 YR5/8
第5層	暗褐色土	10YR3/4
第6層	暗褐色土	10YR3/3
第7層	黒褐色土	10YR2/3
第8層	にぶい黄褐色土	10YR5/4
第9層	黒褐色土	10YR2/2
第10層	明黄褐色土	10YR6/8
第11層	黄褐色土	10YR5/8
第12層	にぶい黄褐色土	10YR6/4
第13層	にぶい黄褐色土	10YR4/3
第14層	にぶい黄褐色土	10YR5/3
第15層	明黄褐色土	10YR7/6
第16層	黄褐色土	10YR5/8
第17層	明黄褐色土	10YR6/6
第18層	黄褐色土	10YR5/6
第19層	明黄褐色土	10YR7/6
第20層	明黄褐色土	10YR6/8
第21層	明黄褐色土	10YR6/6
第22層	明黄褐色土	10YR6/6
第23層	明黄褐色土	10YR6/6
第24層	明黄褐色土	10YR6/8
第25層	明黄褐色土	10YR6/8
第26層	黒褐色土	10YR2/3



堆積状況



完掘



堆積土出土遺物
22図 第20号竖穴遺構

3) 土 坑

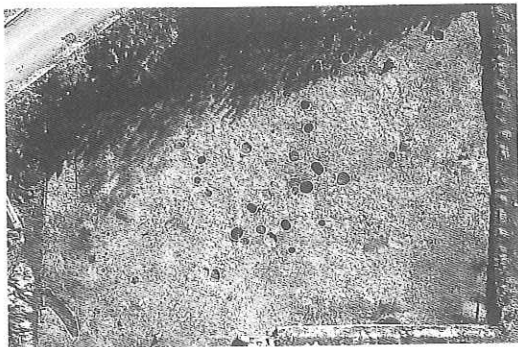
土坑は主として調査区南側の平坦部と北側斜面に分布している。南側に分布する円形のもの、昨年度掘立柱建物跡の柱穴として確認したものであるが、精査の結果土坑であることが明らかになった。尾根方向に向かってまとまりを持って分布し、平面形は円形及び楕円形である。長軸は80cmから1 m20cmのものが多く、円形の場合は鍋底状のものと断面がフラスコ状のものがある。楕円形の場合は、確認面からの深さが5~20cmである。遺物が出土したものは、いずれも円筒上層e式期のものであり、堆積土の上部や中部から土器や敲磨器類、礫などが出土している。

土坑の堆積土は、黒褐色土を主体としており、精査したものはいずれも人為的堆積であった。

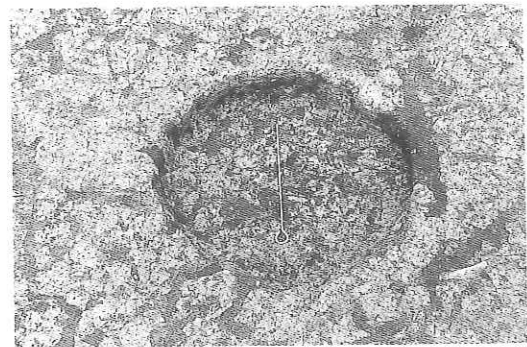
南側の土坑群の性格については、土坑墓の可能性はあるものの、様々な形態のものがあることと配置の規則性が確認できないことこともあり、明確ではない。

北側斜面のものは円形で直径が60cmから1 m程度のものが多い。Ⅲ K-136に位置する第905号土坑は、断面がフラスコ状であり堆積土中部から石槍が、堆積土下部から底面にかけて榎林式土器1/2個体と円筒上層e式土器の大破片が出土した。周辺の他の精査土坑は、時期がわかるものはいずれも円筒上層e式期であった。

(斎藤 岳)



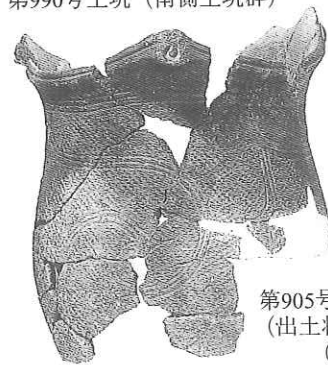
南側土坑群



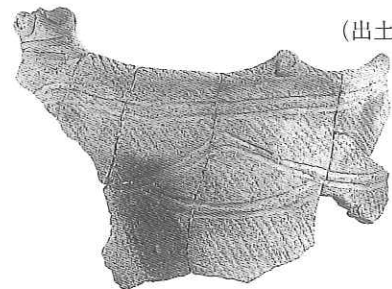
第990号土坑 (南側土坑群)



第905号土坑遺物出土状況



第905号土坑出土遺物
(出土状況写真右側)
(榎林式)



(出土状況写真左側)
(円筒上層e式)

23図 第10次調査区の土坑

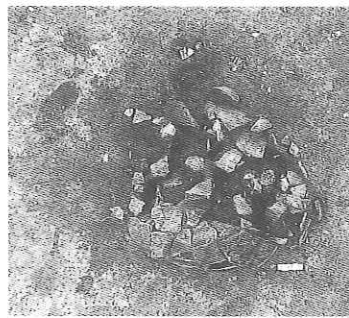
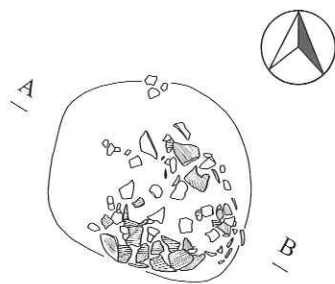
4) 埋設土器

調査区南側のⅢR-149で晩期の埋設土器を1基検出した(第806号埋設土器)。土器内部に赤色顔料が確認され、特に底部付近には約4cmの厚さをもっていた。他に出土遺物はみられない。

土器の残存高は約33.5cmであり胴部径約30cmの壺形土器であるが、口縁部付近を欠失している。口唇部と頸部には弧状の刺突が施され、沈線が口縁部内面に1条、頸部の刺突列の上部に1条、下部に2条ほどこされる。また、頸部の刺突列の上に長さ2cmの粘土紐の貼付がみられる。縄文は節の小さなRL縄文が、横位に施される。焼成は堅緻であり、器厚は約0.5cmである。内面は、赤色顔料が塗布されており、外面においても土器取りあげの際に土器に接する土が赤変していたことから赤色に塗られていた可能性がある。

なお、掘り方は長軸30cm、短軸26cmである。

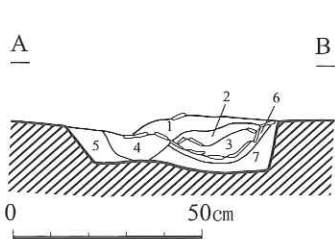
(斎藤 岳)



同一個体
口縁部破片



埋設土器



確認状況

層	土質	色	特徴
第1層	黒褐色土	10YR2/2	
第2層	黒褐色土	7.5YR2/2	
第3層	暗赤褐色土	5 YR3/4	赤色顔料主体
第4層	暗褐色土	10YR3/3	
第5層	暗褐色土	10YR3/4	
第6層	褐色土	7.5YR4/6	赤味あり
第7層	褐色土	10YR4/8	

24図 第806号埋設土器

第3節 平安時代の遺構

調査区南東の尾根筋で竪穴住居跡1棟、土坑1基、溝跡2条を確認した。

第616号住居跡は東壁が2m90cm、北壁が3m30cmであり半地下式の煙道を伴う。

第243号溝跡と第245号溝跡は弧状の溝跡であり互いに向かい合う。なお、第1009号土坑、第243号溝跡、第245号溝跡からは白頭山火山灰と考えられる降下火山灰が検出されている。

(斎藤 岳)



第616号住居跡



第243号・245号溝跡

25図 平安時代の遺構

第Ⅵ章 調査の成果と課題

平成9年度は、集落の全体像を解明することを目的に、第8次から第10次の3地点で行った。調査面積はあわせて5,368㎡であり、出土遺物は縄文時代の土器・石器などダンボール箱で74箱である。各調査区毎の成果と課題は次のとおりである。

1) 第8次調査

今年度の調査までで、土坑墓列は約420mにわたって延びていることが判明した。土坑墓列東端は分布密度が薄くなっていることから、東限に近いことが予想される。また、マウンド・配石などの状況から、当時の埋葬方法を知る上で、良好な資料と思われる。

今回精査した土坑から遺物は出土しなかったため、構築時期を知ることは難しい。これまで調査した土坑墓からも、時期決定可能な遺物は極めて少なく、出土する土器もいずれも小片で、埋め戻し時の混入と見なされるものである。その遺物も考慮に入れ、長大な土坑墓列の構築時期を見ると、列西側に当たる旧野球場建設予定地では、円筒下層d₁式～円筒上層a式が出土し、その東側の第4次調査区では円筒上層b式が出土している。また、第7次調査では円筒上層d₁式の埋設土器より新しい土坑墓が確認されている。さらに、今回の調査区の中に位置する旧都市計画道路で検出された土坑墓からは、完形の円筒上層e式土器が出土している。以上のことから、大まかに見れば、縄文時代前期末葉から中期中葉にかけて、列は西から東へと延びていったと考えられる。ただし、土坑墓と何らかの関連を有すると考えられる縄文時代中期の掘立柱建物跡が土坑墓列西端から連続するように検出されることや、時期的に新しいと考えられる土坑墓に伴う配石が旧野球場内からも検出されていることから、構築順は単純なものではなく、複雑な動きをしていると思われる。それは、土坑墓が一部重複するものも含めて、3・4基ぐらいで小ブロックをつくるような部分もあり、一定の集団の単位ごとの構築域が設定されていた可能性もある。今後、さらに検討を加える必要がある。

2) 第9次調査

本調査区からは、径60cm前後の柱穴が19基確認され、掘立柱建物跡を構成することが判明した。包含層中に構築され、昨年度出土した木柱もこれに含まれる。また、径15cm以下の小ピットも21基確認した。

遺構が確認される面は標高約11mで、北側2～3mで台地は途切れ、沖館川に面する。掘立柱建物跡の主軸は台地の縁にほぼ平行するような配置である。調査区東側は台地斜面に接し、西側は平坦面が約40m続き、南側へ谷地形となって入り込む。柱穴は調査区西側へさらに延びることから、掘立柱建物跡の範囲も拡がるものと考えられる。

掘立柱建物跡の柱間寸法は、約280cm間隔のものと同約350cm間隔のものがある。これらは、台地上の平坦面で確認した掘立柱建物跡の柱間寸法と同様の規模である。

掘立柱建物跡が検出されたことによって、台地上面から一段下がった低い部分にも何らかの施設が存在したことが分かった。建物跡の性格は不明であるが、木柱や掘り方の規模から簡易な施設と

は考えにくい。これら4棟はそれぞれ重複するため、一時的な施設ではなく、数時期にわたって構築・利用されたものであることが分かる。

3) 第10次調査

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、竪穴遺構、土坑、埋設土器などのほか、平安時代の竪穴住居跡などを確認し、その時期や分布状況の概要を把握することができた。

遺構や遺物の多くは縄文時代中期中葉の円筒上層e式期のものであり、三内丸山遺跡の最盛期に南地区へ集落が拡大することが明らかになった。

今回調査したなかで、竪穴遺構とした遺構は、かなりの深さがあり炉の無いこと、テラスや柱穴が存在するものがある等、三内丸山遺跡でこれまで調査されてきた多くの竪穴住居跡や貯蔵穴とは異なるものである。青森市教育委員会による旧都市計画道路建設予定地の調査で類例がある。

竪穴遺構は確認のみのもを含め人為的堆積であり、焼土や土器などが投げ込まれているものもある。来年度以降の調査や類似遺構の集成等により、その性格を把握することが必要である。

南地区においては今後もより詳細な遺構確認を進めることが課題である。

(調査担当者一同)

史跡 三内丸山遺跡 発掘調査報告書一覧（青森県教育委員会関係）

年 度	書 名	青森県埋蔵文化財調査報告書	内 容
昭和51年度	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ） 三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書 —青森県総合運動公園建設関係発 掘調査—	第33集	昭和51年度に調査した県総合運動公 園西駐車場地区の調査報告
昭和53年度	近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ） —青森県総合運動公園建設関係発 掘調査—	第47集	昭和52年度に調査した近野地区の調 査報告
平成 5 年度	三内丸山（2）遺跡Ⅱ —県営運動公園拡張事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—	第166集	平成 4 年度に調査した旧野球場建設 予定地 3 塁側スタンド地区検出遺構 及び第7～8 鉄塔地区の調査報告 平成 4～5 年度の調査概要報告
◇	三内丸山（2）遺跡Ⅲ —県営運動公園拡張事業に係る 埋蔵文化財発掘調査概報—		
平成 6 年度	三内丸山（2）遺跡Ⅳ	第185集	平成 6 年度に調査した旧サッカー場 建設予定地の試掘調査報告
平成 7 年度	三内丸山遺跡Ⅴ —第 1 次～ 4 次調査報告書—	第204集	平成 7 年度に実施した第 1 次～ 4 次 調査の報告
◇	三内丸山遺跡Ⅵ	第205集	平成 4～7 年度の調査概要報告
平成 8 年度	近野遺跡Ⅴ —県営運動公園拡張整備事業に 伴う遺跡試掘調査報告—	第216集	平成 6～7 年度に調査した近野地区 の試掘調査報告
◇	三内丸山遺跡Ⅶ —第 5 次～ 7 次調査概要報告書—	第229集	平成 8 年度に実施した第 5 次～ 7 次 調査の概要報告
◇	三内丸山遺跡Ⅷ —第 6 鉄塔地区調査報告書 1—	第230集	平成 4～5 年度に調査した第 6 鉄塔 地区の検出遺構及び第Ⅲ～Ⅴc層の調 査報告
平成 9 年度	三内丸山遺跡Ⅸ —第 6 鉄塔地区調査報告書 2—	第249集	平成 4～5 年度に調査した第 6 鉄塔 地区の第Ⅵa・Ⅵb層・遺構外及び自 然科学分野の調査報告
◇	三内丸山遺跡Ⅹ —旧野球場建設予定地発掘調査 報告書 2—	第250集	平成 4～6 年度に調査した旧野球場 建設予定地の検出遺構のうち竪穴住 居跡に関する調査報告
◇	三内丸山遺跡Ⅺ —第 5 次～ 7 次調査報告書—	第251集	平成 8 年度に実施した第 5 次～ 7 次 調査の報告
◇	三内丸山遺跡Ⅻ —第 8 次～10次調査概要報告書—	第252集	平成 9 年度に実施した第 8 次～10次 調査の概要報告

報 告 書 抄 録

ふりがな	さんないまるやまいせき
書名	三内丸山遺跡Ⅻ
副書名	第8次～10次調査概要報告書
巻字	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第252集
編著者名	岡田康博・斎藤岳・小笠原雅行・佐々木真理子・葛城和穂
編集機関	青森県教育庁文化課
所在地	青森市新町2丁目3番1号 TEL 0177-34-9924
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんないまるやまいせき 三内丸山遺跡	あおもりけんあおもりし おおあざさんないあざまるやま 青森県青森市大字三内字丸山	02201	01021	40° 48′ 40″	140° 42′ 20″	1997.5.26 ～ 1997.11.14	5,368	集落規模・変遷解明のための 学術調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
三内丸山遺跡	集落跡					縄文時代前・中期の巨大集落跡 3地点(8～10次)にわたる調査
第8次調査		縄文時代 平安時代	土坑 道路跡 円形周溝	23基 1条 1基	縄文土器(中期) 石器 土師器(平安時代) 須恵器()	縄文時代土坑墓列の広がり確認 (西端～東端は420m以上と確認) 円形周溝マウンド確認
第9次調査		縄文時代	掘立柱建物跡 柱穴 焼土 遺物包含層	4棟 14基 1基 1	縄文土器(中期) 石器() 木柱()	掘立柱建物跡の確認 木柱さらに1本検出
第10次調査		縄文時代 弥生時代 平安時代 近世 時期不明	竪穴住居跡 竪穴遺構 土坑 埋設土器 焼土 土坑 住居跡 土坑 溝跡 掘立柱建物 土坑 柱穴	24棟 17基 79基 1基 1基 1基 1棟 1基 2条 1棟 3基 97基	縄文土器 (中・晩期) 石器(中期) 土偶() 土・石製品() 土師器(平安時代) 須恵器() 近世陶磁器	縄文時代中期住居跡群の確認 〃 〃 竪穴遺構の確認 〃 〃 土坑群の確認 〃 晩期埋設土器の確認

SUMMARY

Sannai-Maruyama, a National Historic Landmark, consists of the remains of a village which served as a cultural center from the early to mid Jomon Period (3500 BC to 2000 BC). The Aomori Prefectural Board of Education has been excavating the site in order to determine the full extent of the village. In 1997, 3 areas were investigated; the 8th, 9th, and 10th overall investigations.

The focus of the 8th investigation was to confirm the extent of the remains of a row of earthen-pit style graves and the nearby remains of a road. It was found that the remains of the road are sandwiched in-between two north to south running rows of earthen-pit style graves. The range from the easternmost grave to the westernmost grave extends approximately 420 meters.

The 9th investigation centered on the area around the remains of a chestnut tree pillar discovered in 1996. Here, a number of similar pillar holes were found that are believed to have been used to support standing-pillar storage buildings.

In the 10th investigation we attempted to determine the extent of the remains of pit dwellings in the south side of the village and the development of the dwelling region during the 1,500 year span of the Sannai-Maruyama village. Through the discovery of further remains of pit dwellings and additional large deep holes, we have been able to understand the Sannai-Maruyama period and the organization of the village's dwelling area.

青森県埋蔵文化財調査報告書第252集

三内丸山遺跡 XII

—第8次～10次調査概要報告書—

発行日 平成10年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県教育庁文化課

〒030-0801 青森市新町二丁目3-1

印刷所 東北印刷工業株式会社

〒030-0902 青森市合浦一丁目2-12
